

権現山遺跡

1987年3月

静岡県磐田郡浅羽町教育委員会

凡 例

1. 本書は県営ほ場整備事業浅羽工区の1985年度、1986年度工事箇所の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 調査費用は、中遠農林事務所が総額の72.5%負担し、残りの27.5%が国・県の補助金である。
3. 調査は、1985年5月7日から4次に分けて行い、1987年3月31日までに全ての作業を終了した。

1次から4次の調査期間と概要は「Ⅱ 調査の経過」に記した。

4. 調査は、静岡県教育委員会文化課の指導の下で行ったが、調査体制は下記のようにある。

調査主体者 静岡県磐田郡浅羽町教育委員会教育長 鈴木 豊

調査担当者 柴田 稔

調査補助員 鈴木一郎、柴田真由美

事務局 浅羽町教育委員会 担当 原 利秋

作業員 三輪一雄、安間富平、檜下安吉、伊藤可一、鈴木常太郎、岡本慎一、藤原一恵、岡本春子、近藤美江、伊藤 正、鈴木良一郎、村松茂正、大杉三郎、金原尚雄、笹ヶ瀬恭一、鈴木礼次郎、柴田あい子、村松しず江、原 美代子、武田みつ子、川村義雄、原 しか、鈴木露子、岡本きた、長島みつ、渥美敏子、飯田祥人、鈴木律子、原 すが

5. 資料の整理、本書の執筆は柴田が行ったが、遺物の水洗い・注記・復元は岡本春子が行い、須恵器・陶器などの実測は柴田真由美が行い、石器の実測は鈴木一郎がおこなった。
6. 調査に当たっては、静岡大学の加藤芳朗教授、市原壽文教授から各種のご指導を得た。また、多くの先学諸氏、諸機関のご指導ご協力を得た。御芳名を記して感謝の意を表したい。

木越邦彦、角田史雄、嶋倉巳二郎、小林重義、実川順一、金原長平、岡本慎一、岡本光一、柴田静夫、中遠農林事務所、浅羽町土地改良区、松原自治会、梅山自治会（敬称略順不同）

7. 本書で使用している標高値は、江川排水路改修工事に用いたものを利用している。断面図では水平を示す——の下に記した数字が標高値(単位cm)である。

序 文

旧上浅羽、西浅羽、東浅羽、幸浦、豊浜の5村は浅羽五ヶ村とか浅羽庄と呼ばれていた。また、江戸時代には浅羽一万石ともいわれた穀倉地帯であった。

浅羽町は、この五ヶ村の上浅羽、西浅羽、東浅羽、幸浦が合併して浅羽村となったのちに町制が施行されたものである。

浅羽の地名は、万葉集巻11に「紅の浅葉の野らに刈る草の東の^{あひだ}間も^か吾を忘らすな」という歌があり、万葉の時代に遡って存在したと考えられたり、12世紀に浅羽庄司宗信で知られるように浅羽氏が支配していたことから付けられた地名であると考えられたりしている。しかし、いずれも正確な検証はされていない。

今回、県営は整整備事業に伴って事前の発掘調査を行った権現山遺跡は、丁度浅羽氏が活躍した時代とそれ以降の時代を中心とした遺跡であり、浅羽の解明が期待された。

調査は、浅羽町在住の柴田稔氏に担当者をお願いし、より正確かつ確実な結果が得られることを期待して、静岡大学の加藤芳朗教授、市原壽文教授からもご指導を得た。また、地元の松原自治会の皆様を始めとした多くの人達には作業員としてご協力いただいた。また、関係機関の諸氏にも多大なご援助を得ている。個別にお礼申し上げなくてはならないとも感じているが、本書面を借りて深謝の意を表したい。

調査では、縄文時代の石器や弥生時代の墳墓も発見され、太平洋に近い町の南部でも随分と古い時代から人々が生活していたことを知らされた。また、中世の遺構・遺物もたくさん発見され、当時の農村の一端を見ることができた。シジミを中心とした貝塚は、私達が子供のころ川でシジミ獲りをしたのを思い出したが、当時の農村の食生活では、貝や魚は貴重な蛋白源であったのであろう。

発掘調査報告書を刊行するに当たり、少しずつ明確になって行く浅羽の歴史に喜びを感じつつ、関係各氏に感謝の意を表し序文にかえさせて戴く。

1987年3月

磐田郡浅羽町教育委員会

教育長 鈴木 豊

目 次

I 調査に至る経過	1
II 調査の経過	2
III 周辺の環境	5
1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	14
IV 遺跡の概要	18
1. GN1 地点	22
2. GN2 地点	35
3. GN3・4 地点	40
4. MY 地点	47
V 出土遺物の概要	59
1. 縄文時代の遺物	59
2. 弥生時代から古墳時代前期	60
3. 古墳時代後期から奈良時代の遺物	61
1) 埴輪	61
2) 須恵器	62
3) 土師器	63
4) 古墳時代後期から奈良時代の遺物出土状況の特徴	63
4. 平安時代後期から鎌倉時代の遺物	63
1) 陶器	63
2) その他	66
お わ り	67

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡周辺の遺跡分布図	8
第 2 図	遺跡周辺の砂堤列・自然堤防の復元	9
第 3 図	砂堤列間低地横断柱状図	11
第 4 図	権現山遺跡位置図	19
第 5 図	各地点の位置	20
第 6 図	GN1地点遺構配置図	21
第 7 図	GN1地点土層断面図	23
第 8 図	GN1地点K-1実測図	25
第 9 図	GN1地点K-2実測図	26
第 10 図	GN1地点K-3～5実測図	27
第 11 図	GN1地点I-1・2・4実測図	29
第 12 図	GN1地点I-3実測図	30
第 13 図	GN1地点I-5・6実測図	31
第 14 図	GN1地点東端部遺構配置図	33
第 15 図	GN1地点X-1付近断面図	34
第 16 図	GN2地点全体図	36
第 17 図	GN2地点I-1実測図	38
第 18 図	GN3・4地点完掘実測図	39
第 19 図	GN3地点低地遺物出土状態	41
第 20 図	GN4地点K-1実測図	42
第 21 図	GN4地点周溝基実測図	43
第 22 図	GN4地点K-2・3実測図	44
第 23 図	MY地点貝塚周辺断面図	48
第 24 図	MY地点全体図	51
第 25 図	MY地点貝塚・井戸群実測図	53
第 26 図	各地点出土の石鏃	59
第 27 図	GN2地点出土の土師器	60
第 28 図	各地点出土の埴輪	61
第 29 図	各地点出土の須恵器	62
第 30 図	MY地点出土の土師器	63
第 31 図	GN1地点出土の伏罽	63
第 32 図	各地点出土の陶器(平安後期から鎌倉時代)	65

写真図版目次

- 図版 1 上 GN1地点K-1調査状況
下 GN1地点K-2調査状況
- 図版 2 上 GN1地点K-2遺物出土状況
下 GN1地点K-3~5と1-5
- 図版 3 上 GN1地点I-3井戸粹検出状況
下 GN1地点I-4調査状況
- 図版 4 上 GN1地点I-6調査状況
下 GN2地点完掘状況
- 図版 5 上 GN2地点I-1調査状況
下 GN2地点小穴群調査状況
- 図版 6 上 GN2地点D-1調査状況
下 GN3地点西側低地内遺物出土状況
- 図版 7 上 GN3地点貝塚検出状況
下 GN4地点完掘状況
- 図版 8 上 GN4地点周溝墓調査状況
下 GN4地点南東側低地内石鍬出土状況
- 図版 9 上 GN4地点K-1調査状況
下 GN4地点D-1調査状況
- 図版 10 上 GN4地点P-1調査状況
下 MY地点P-1調査状況
- 図版 11 上 MY地点P-1と溝状遺構
下 MY地点貝塚調査状況
- 図版 12 上 MY地点貝塚調査状況
下 MY地点貝塚調査状況
- 図版 13 上 MY地点貝塚遺物出土状況
下 MY地点貝塚断
- 図版 14 上 MY地点井戸群調査状況
下 MY地点I-11発見状況

I 調査に至る経過

1982～1983年の3月にかけて、県営圃場整備事業に伴って浅羽町青木遺跡の調査を行った。この調査は、すでに報告したように、浅羽平野の文化を研究する上で画期的なものであった。

浅羽平野の成立は、後項で記すように数千年以前にさかのぼり、人の生活も数千年以前から開始されていた。このことは、最近の地質学、考古学の調査で当然のこととなっていたが、町民の多くは、その事実は知らず、文化の開始は浅羽庄以降と考えていた。そういう中で、縄文時代の石器や弥生時代の土器が次々と発掘されたことは、それ自体が郷土の文化を再検討する契機となった。

当権現山遺跡は、そうした町民の文化研究への興味の中で、数度にわたる郷土史講座や研究会が開かれ、遺物の散布地や土層の変化を教えられ、それを確認する形で発見したものである。

その意味からすれば、圃場整備事業の工事開始直前に周知の遺跡となったものであり、また、紙一重で完全破壊を免れたものでもあった。

1984年12月に、浅羽町教育委員会は、若干のグリット調査を含めた踏査を企画し、遺跡の性格を検討した。

この結果、権現山遺跡は、鎌倉時代を中心とした遺跡であろうことが理解できたが、奈良時代の遺物も少なからず採集された。また、幸い圃場整備事業の対象から外れていたものの、径約40mを越える大円墳である地藏山1号墳や小古墳である2・3号墳、および法音庵古墳、相馬遺跡などを確認した。

これらは、いずれも浅羽町としては画期的発見であり、貴重な文化財であった。

権現山遺跡は、1985年度には圃場整備事業の行われる場所でもあり、町教育委員会は、至急関係各課と協議し、工事の具体的計画、調査の具体的方法などを検討した。

この検討で、工事開始の1985年夏までに、工事予定箇所全ての調査は不可能であることを確認し、当面の工事に最も影響する場所から順次調査し、工事の延期可能な場所については次年度に調査する可能性もあるという決定をした。

しかし、工事との関連で、調査は必ずしも最速期に行うことができず、雨期には調査が難行することが当初から予測された。

また、調査する遺跡は、砂堤上の遺跡であり、浜松市伊場遺跡などの調査例はあったが、調査する側でも、これらの資料検討が十分できる期間はなく、準備不足のまま調査開始となった。

II 調査の経過

調査は1985年5月7日から開始したが、調査と工事の都合上4次に分けて行い1～4次調査とした。

各調査の期間は次のようである。

第1次調査（60県はその1分）

中遠農林事務所負担分 1985年5月7日から1985年8月6日まで

第2次調査（60県はその1の国・県補助分、60県はその2分）

国・県補助分（その1分） 1986年12月16日から1986年1月14日まで

中遠農林事務所負担分 1986年1月14日から1986年3月20日まで

国・県補助分（その2分） 1986年3月20日から1986年3月31日まで

第3次調査（61県はその2分）

中遠農林事務所負担分 1986年6月15日から1986年9月13日まで

国・県補助分（その2分） 1986年9月14日から1986年10月31日まで

第4次調査（61県はその2分）

中遠農林事務所負担分 1986年11月1日から1987年1月6日まで

国・県補助分（その2分） 1987年1月7日から1987年3月31日まで

調査の面積は、第1・2次調査が4,437㎡であり、第4・5次調査が2,900㎡である。

各調査の経過は次のようである。

第1次調査

圃場整備事業の水路新設箇所およびGN1、2地点を調査の対象とした。

GN1地点に3箇所、GN5地点に1箇所、GN1地点からGN3地点にかけての水路用地に2箇所のグリットを設定し、遺跡の状況を調査した。この調査で、GN1地点とGN3地点間の水路用地は低地の堆積物が厚く、遺跡の外側であることが判明した。また、GN5地点とGN3地点の水路用地は遺跡の可能性は濃厚であったが、グリットでは確認できなかったため、立会い調査の対象とした。したがって、第1次調査は、GN1地点に限定された。また、水路の新設が工事の中で優先されたため、水路用地を調査でも優先したが、GN2地点は、水路で分断されるため、水路用地以北を調査対象とした。GN2地点の全体図では、S2ラインから北が第1次調査の対象である。

調査は、グリットによって確認した層位にしたがって、無遺物層は電機によって除去してから開始した。

包含層は遺構検出面まで人力で除去し、対象範囲全体の遺構の状況を掌握した後、東側から開始したが、北東側の低地への移行部は湧水のため当初は調査不能であった。

東側から順次西へと調査を進めていったが、途中で無遺物層をさらに掘下げると、遺構が検出

されるという事実を発見し、再び東側に戻ると共に、低地の調査も開始した。

東から順次西に進んだ結果、西側の一部が予定期間中に調査することができなくなり、水路工事に必要な最小限だけ調査し、残りの一部は第2次調査分とした。これが第2次調査の最初の国・県補助分である。

第2次調査

第2次調査は、同年度に国・県の補助金で調査することになっていた北山遺跡の第2次調査終了後に開始した。

最初に第1次調査の残余分を行い、続いてGN1地点のS2ライン以南を行った。

調査の方法は、第1次調査と同様である。

GN1地点の調査が終了次第GN2地点の調査を開始した。

この地点は確認調査では不明確であったが、水路工事の立会い調査において若干の陶器を採集したため、GN3・4地点と共に調査の対象としたものである。

遺跡の把握は、南北に1本、東西に1本のトレンチを設定して行った。これは、遺跡の可能性を明確にすることと、層位の確認のためである。また、GN3地点も同様な方法で遺跡の把握を行った。

無遺物層は、GN1地点と同様に重機を用いて除去し、以後は人力で行った。

この地点は、重機による排土作業中に埴輪の破片が発見されたため特に注意して調査した。

第3次調査

第3次調査は、GN4地点とMY地点を対象にしたが、MY地点は、概ねW30ライン以西を第4次調査の対象とした。

GN4地点は、遺跡の把握のために南北に1本のトレンチを設定した。このトレンチで、間違いない遺跡であることが確認できたため、他の地点と同様に、重機を用いて排土作業を行ったが、さらにトレンチを3本設定して遺跡の把握を行った。この調査で地点の中心部を南北に貫通する溝状遺構以西ではほとんど遺構・遺物が採集できなかった。このため、調査は溝状遺構以東を重点的に行った。

MY地点は、当方の工事に対する監督に不手際があり、一部が未調査のまま破壊されたが、この破壊に伴って観察した層位を基準にして、重機による排土作業を行った後、人力によってトレンチを南北に8本設定して遺跡の把握を行った。

この地点の調査は、9月末日から開始したが、季節的に調査に最も適した時期であったため、他の地点に比較すると急ピッチで進めることができた。

第4次調査

第4次調査は、MY地点の西端部約550㎡を対象に行った。

溝状遺構(D-8)などの遺構が、第3次調査範囲と連続していたため、それらとの関連調査を行う必要があり、一部では第3次調査箇所の再調査も行った。

第4次調査は、1987年末日で現地作業を完了したが、機材の撤収などは翌年になった。

1987年は、2年間の調査資料を整理し、報告書を作成した。

暗中摸索で開始した調査の整理は難航したが、3月31日をもって完了した。

Ⅲ 周辺の環境

1 地理的環境

浅羽町南部の水田地帯を東に隣接する大須賀町の範囲まで拡大してみると、この地域の地形に関する研究としては、最も新しい研究としては加藤芳朗氏の業績(1985・加藤)をあげることができるが、戦前には、多田文男氏の研究(1943・多田)があり、静岡県史にも浅羽平野あるいは浅羽平地という項目が設けられているのを見ることができる。

とくに、加藤氏による一連の研究は、観望遺跡の発掘以来30年にわたる現地調査に基づいた地学的研究であり、多くの点で考古学に対しても貴重な示唆を与えるものである。

近年、浅羽町の南部で次々と遺跡が発見され、考古学に新しい提言をしようとしているのも、基を正せば加藤氏の研究成果を考古学の側から実証しているとも言えることである。

その意味からすれば、今改めて浅羽平野の地理的環境を云々する必要もないと思われるが、今回報告する遺跡の立地する付近に限定して、その地理的環境を概観したい。

この付近の地形は、大きく見れば自然堤防からなる微高地、砂堤からなる微高地、砂堤によって外海から遮断され、自然堤防によって原野谷川からの土砂の供給を止められた低湿地(浅羽低地)、および砂堤列間低地から構成されている。

以下にこれらの概観を記すが、第1図と第2図の関係および表-1の関係は、次のようである。

第2図は、浅羽町でも東浅羽地区といわれる地域を中心にそれらの微高地の分布を図示したものであり、第1図とは三角点(図上P)でオーバーラップするように縮尺してあるが、第1図は1968年版の静岡県発行「遠州南部地区地形図」を基にして作成したものであり、後者は、1982年修正の浅羽町発行「浅羽町全図」を用いているために全てが整合するわけではない。また、第2図の地名は明治初期のものであり、本文で説明のため使用した工場・施設・神社などの名称は、第1図に記されているものである。表-1の遺跡番号は、第1・2図に共通している。

1) 自然堤防

第2図の内、縦波のトーンで区別したのが自然堤防である。

石原から新堀にかけての自然堤防は3列観察できる。西側のものは、極微細程度にしか観察できない。また、東側のものは、県道浅名一同笠線に添っているが、近年の圃場整備で低平化され、極僅かに島畑として残存する程度である。中央の自然堤防は、新堀(にいぼり)地区の集落が立地している。

これらの自然堤防は、諸井一浅羽一浅名 豊住一新堀と続く原野谷川の旧流路によって成立したものである。また、東側と中央との自然堤防に囲まれた旧流路は、上層1m以上が平安時代後期以降の埋積であることも、青木遺跡などの調査で確認されている(1984・柴田)。

新堀地区より南では極めて不鮮明になる。しかし、6～9の遺跡が立地する部分は、現状では

ほとんどが低平な水田になっているが、1960年代前半頃までは、僅かながら島畑が見られた。また、6～8の遺跡は部分的な発掘が行われており、いずれも粘土層の上に立地している。とくに、馬場第1遺跡(6)は、原野谷川水系に連続する砂利層が水田面直下に現れており(1982・柴田)、自然堤防上に位置することが歴然としていた。

粘土層の微高地は、松山の北側から東側の一部をかすめるようにして、南側に回り込みながら南に向かい、現在の浅羽南小学校の北東側あたりまで確認できる。松山の南側に延びる自然堤防は、現在では全く見ることはできないが、1967年当時は、大小51箇所の島畑が存在した。

この自然堤防と松山集落との間の低地は、新堀(しんぼり・にいぼりとは別である)という地名が残り、低温の湧水のために稲作ができなかった場所があったといわれ、原野谷川水系の末端を思わせている。また、この自然堤防は、松山、東山などの現梅山集落に近接していながら、大半が700～800m南の東同笠地籍であり、江戸時代までは山名郡と城東郡との郡境となっているのも興味深い事実である。

東同笠地内の国道150号線の北側に、北西から南東に向かう微高地がある。これも先の自然堤防の延長と考えられるが、今は確認できないため、砂堤の一部としてあつかっている。

自然堤防は、新堀付近では現在の標高約3mであり、松山の南側では標高2mに満たない。

また、梅山八幡神社の北西側には、砂堤に接するようにして水田面下約1mの位置に砂礫層が見られ、旧流路と砂堤がぶつかっていることを伺わせている。

中畦堤は、中世の初期に造られた可能性が高いことは、歴史的環境で指摘するが、第2図の西端付近からは北上し、一色地区で原野谷川の自然堤防に接する。また、東端付近からも北上し、新堀の自然堤防を通過してから残存湖にそって東に延びていたが、これらも自然堤防を利用して造られた可能性は極めて高い。

2) 砂堤

第2図のドットのトーンで表現したのが砂堤である。また、下端の太郎助や同笠新田は、第1図に見られるように浅羽町の辛浦地区の砂堤列の一部であり、中新田 大野 東同笠 西同笠 太郎助 湊と続く、遠州灘の沿岸を形成している。

これより北側にあり、不鮮明ながら数列見られるのが東浅羽地区の砂堤であり、その東西両側が原野谷川の旧流路によって分断されている。これらの砂堤は概ね6～7列あると考えられる。

第1砂堤 松山―梅田―初越―西ヶ崎へと続く砂堤である。東西約3.3kmにわたって確認できるが、大須賀町石津―横砂―横須賀と続く砂堤と同一のものであろう。途中4箇所で見失われたり途切れるところが見られ、とくに、初越―梅田間は約700mにわたって途切れている。これは、旧原野谷川の流路と大きく関係するものであろう。また、他の部分は、浅谷あるいはこれを利用して水路であろう。

西ヶ崎、初越では、小規模な砂丘も見られ、西ヶ崎明の宮神社では、標高約3.3mである。しかし、全体としては標高2.5m以下であり、住宅の立地する付近でも1.8m程度の部分もある。

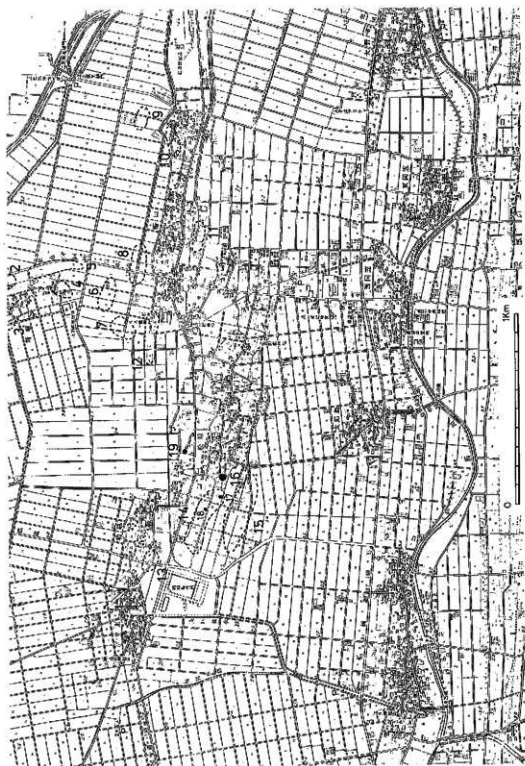
第Ⅱ砂堤 東山から松原北部にかけての約1kmにわたって確認される。東端は、松山南側の旧流路で切られ、以東には続かない。西側は、第Ⅰ砂堤の手前約300mで確認できなくなる。これは、原野谷川の旧流路の一つが第Ⅰ砂堤を突き破って西に流れたためではないかと考えられるが、第Ⅰ砂堤と第Ⅱ砂堤以下とはその延びる方向にも若干の違いがあり、第Ⅱ砂堤以下を延長すれば交錯するようになる。現在浅羽町農協本所が立地するのはこの砂堤である。

東端付近の北側で、第Ⅰ砂堤と間の砂堤列間低地に東西に長い島状の微高地がある。その北側のものは、第Ⅰ砂堤に属し南側のものは第Ⅱ砂堤に属するであろう。

全体に低平で標高は最高位で約2.6m、全体としては2.5m以下である。

表-1 各遺跡の概要

番号	遺跡名	立地	時期	概 要
1	石 原	自然堤防	弥生～鎌倉	土器、陶器(表面採集)
2	北 狭 間	"	"	"
3	屋 敷 通	"	奈良～鎌倉	"
4	黒 清	"	"	"
5	青 木	"	縄文～鎌倉	縄文土器(1点)、土器、陶器、土坑、住居跡
6	馬 場 第 1	"	古墳～鎌倉	土器、陶器、磁器、掘立柱建物、土坑、溝
7	馬 場 第 2	"	古墳～鎌倉	土器、陶器、磁器、小穴群、井、溝
8	西 立	"	平安～鎌倉	土器、陶器、磁器、井戸
9	宮 前	"	"	土器、陶器(表面採集)
10	松 山	砂 堤	縄文～鎌倉	縄文土器(2点)、石斧、土器、陶器(表面採集)
11	村 前	"	"	剥片(1点)、土器、陶器
12	宮 西	"	"	スクレーパー(1点)、弥生中期土器、蔵骨器
13	相 馬	"	平安～鎌倉	土器、陶器(表面採集)
14	宮ノ腰(MY)	"	縄文～鎌倉	石鏃(1点)、土器、陶器
15	権現山(GN)	"	"	石鏃(2点)、周溝墓(弥生中期)、埴輪
16	地藏山1号墳	"	古墳(6C)	埴輪
17	" 2号墳	"	" (?)	
18	" 3号墳	"	" (7C)	須恵器(長頸甕)
19	法音庵古墳	"	" (?)	



第1図 道跡周辺の道跡分布図

第Ⅲ砂堤 東山の南東部付近から松原の中心部を通過し、西端まで続く。東端は、旧流路で切られ、西端は、第Ⅰ砂堤の南側50mで見えなくなる。次の第Ⅳ～Ⅴ砂堤とも関連するが、第Ⅱ～第Ⅴ砂堤の西端は東西にはほぼ一直線になり、その末端が第Ⅰ砂堤と平行して位置するのが特徴である。

松原研修センターはこの砂堤に立地しているが、この付近と西端付近では第Ⅳ砂堤と連続している。

最高位は、松原研修センター付近で標高約3mであるが、全体としては2.5m以下である。

第Ⅳ砂堤 第Ⅲ砂堤東端の直ぐ南側から始まり、同じく西端より約150m西までの約1.6kmにかけて確認できる。大御前神社が立地する砂堤であり、この付近で標高約3mであるが、全体としては2.5m以下である。

第Ⅴ砂堤 松原の中央部南端付近から西ヶ崎の南約150mまでの間約1.3kmにわたって確認でき、西端は現昭和製作所内で終わる。侵食が激しく、3箇所で途切れており全体は不鮮明である。宮の腰遺跡(MY地点)はこの砂堤に立地している。全体に低平であり、最高位でも標高約2.7mであり、2.5mを越える地点は少ない。

第Ⅵ砂堤 松原地区の西端に東西約400mのみ確認される小規模な砂堤であるが、第Ⅴ砂堤とは明らかに区別できる。また、第Ⅴ砂堤東端の南側に現在では見ることのできない微高地があり、これと関連する可能性は高い。権現山遺跡の立地する砂堤であり、標高2.5m以下である。

第Ⅶ砂堤 第2図下端に偶かに示したものであるが、遠州灘沿岸に延々と続く砂堤である。

この砂堤は、さらに数列に分けられるがここでは総称して置く。また、第Ⅶ砂堤と第Ⅷ砂堤との間にさらに一列砂堤を追加できるかもしれないが、検討課題としたい。

3) 砂堤列間低地

肉眼的に現認できる範囲の砂堤列を検討して見たが、これらの列間には低湿な砂堤列間低地が見られる。砂堤が近接していることからこれらの低地の幅は200mを越えることは少なく、幅20～50m程度の狭少な低地が、数百mも続く場所が多く、また低地内には、小規模な島畑が点在することが多い。これらは、砂堤が隣接している部分を水田化する時に、水田を平坦にするため畑寄せしたものと解釈している。また、第Ⅰ砂堤の大きく途切れる部分が原野谷川の旧流路と考えれば、この低地はある時期は川としての役割をも果たしていたと見ることができる。

低地の標高は、2m前後であり、松山南側の新堀(しんぼり)や同じく北側の第Ⅰ砂堤と自然堤防の間など、旧流路を推定している場所のように、標高1m程度の部分は見られない。

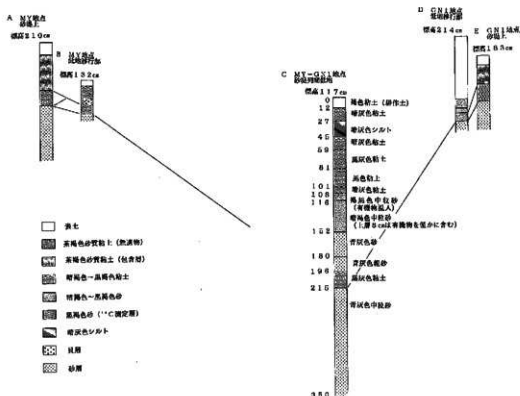
第3図の中央は、GN1地点から北へ約50m、MY地点から南へ約100mの地点(第2図の×印)の柱状図である。これによると、水田面下約1.1m(標高約10cm)までは暗灰色から黒色の粘土あるいはシルトが堆積している。さらに水田面下約1.5m(標高約-30cm)までは有機物を含む黒砂層である。黒砂層の下は、水田面下約2m(標高約-80cm)まで青灰色砂層である。この砂層の下は再び黒灰色粘土層になり、水田面下約2.2m(標高約-100cm)まで続いた後、厚い青灰色の砂

層になっている。これは、いわゆる「沖積上部砂層」(1983・井関)に相当すると思われる。

この柱状図は、砂堤列間低地の中心より若干砂堤に近い、低地の中心部では堆積する層全体が厚くなると共に、青灰色砂層までの深さも増すことが予測される。

この柱状図から得られた層序と、GN1～4およびMY地点で得られた砂堤から低地に移行する部分との層序がどのように関連するかについてを判断する資料は十分ではないが、砂堤列が陸地化した後に、砂堤列間低地では、少なくとも二度は湿潤な時期があり、二度は比較的乾燥した時期があったようである。

いま、この柱状図を単純に見れば、最下層の青灰色砂層は、縄文海進後の海面が最低下した時期に対比する砂層であろう。その上の黒灰色粘土は、弥生時代頃の小海進(1975・井関)に伴った堆積物と考えることができる。袋井市史で示されているように、この小海進で浅羽低地はかなりまで埋積(1983・大庭)したようであり、実際には柱状図で見られる以上の堆積があったと見てよいであろう。黒灰色粘土層の上に堆積している青灰色砂層は、砂堤から供給された堆積物と見ることができるが、少なくともボーリングの地点では湿潤な状態ではない。このように考えれば、水田面下約152cmから上に堆積した暗灰色中粒砂は古墳時代およびそれ以降に海水準が上昇したか、あるいは砂堤列間低地が湿地化した時期の堆積物であるとみることが可能である。ま



第3図 砂堤列間低地横断柱状図

た、上層の粘土・シルト層は、青木遺跡や馬場遺跡において、自然堤防の後背湿地が、平安以降に急速に埋積している事実などを考慮に入れると、平安後期以降の堆積物と見ることが可能であろう。しかし、これらについては、さらに検討の余地が多い。

第3図右側のGN1地点の柱状図に見られる黒褐色有機砂層の、 ^{14}C 測定値は 2300 ± 90 年B.P.(350年B.C. GaK-13091)という結果がでており、井関(1975)の弥生中・後期の海水準の上昇期に比定しうる可能性が強い。したがって、縄文海進に続く海退に伴って、砂堤および砂堤列間が大きく侵食された後の海水準の上昇期の堆積と見て差し支えないようである。ただ、その直上の層は、砂堤の浅谷などの一部を除いて各地点で平安後期から鎌倉時代にかけての遺物を包含する層であることが確認されており、両者の間には、砂堤から低地に移行する部分などの多くで、なんらの層位をも発見できない。また、後項でも示すが、砂堤上でも、奈良時代頃までの遺構は砂堤列間低地へ移行する部分も含めて、侵食を受けた後に、平安後期以降の層に覆われていることが確認された点、あるいは平安後期以降の包含層直下に、弥生～古墳時代の遺構が残存していたが、包含層は全くみられず、遺物は平安後期以降の陶器などと混在していたという事実などを考慮に入れると、縄文時代晩期以降平安時代後期まで全く堆積がなかったとみるよりは、MY地点の貝塚が形成された浅谷などの極一部を除いて奈良～平安時代中期までの間にほとんど流亡していたという解釈ができそうである。

これらの点は、少なくとも浅羽平野では、従来の後水期の海水準変化の所見に加えて、海水準の低下の時期は奈良時代以降まで継続したと見ることと、平安時代後期から鎌倉時代(特に、鎌倉後半)頃に海水準の上昇期があったと見ることができよう。しかし、井関氏の指摘(1983・井関)があるように、地盤の変化や、山林の荒廃などに誘因された可能性も検討すべき課題であろう。

以上は、浅羽平野の遺跡と地形学上の諸事実からの結論であるが、その結果は、多田論文ととりあげている浅羽平野の東に続く湿地で論じている内容とも一致するところが多い。

4) ま と め

浅羽町の南部での考古学的調査は、開始されて日が浅く、今後どのように展開して行くのか予断を許さない部分が少なくない。たとえば、松山遺跡(10)からは縄文時代後期から晩期頃の土器も採集され、各遺跡から石器や刺片が採集され、少なくとも縄文時代後期には、縄文人の生活の領域の中にあり、場合によっては集落跡が発見される可能性すら出てきている。また、海岸平野では、自然堤防上に立地する遺跡よりも、砂堤上に立地する遺跡の中に、より古い遺物が多く存在する可能性も出てきた。

特に、砂堤列を中心として海水準の変化を見て行くと、縄文時代後・晩期頃、古墳中期頃、平安時代前・中期頃など、浅羽平野の所見では海水準が低下していると考えられる時期の遺跡が遠江地方全体に極めて希薄になっていることに気が付く。これは、偶然の一致とばかり言えないことのように思える。伊場遺跡の調査においても、砂堤から発見された縄文時代の土器・石器は、

砂堤の成立史という自然科学的立場からは深く検討されているが、遺跡としてはそれほど重視されていない。しかし、こうした砂堤や自然堤防上に、分布が希薄な時期の遺跡は伏在しているのではないということも予測している。こうした検討は、今後「考古学的立地論」(1985・市原)として進められるものであろう。

また、本項および後項で使用している ^{14}C 測定は、市原壽文先生のご好意により、学習院大学・木越邦彦先生に測定をお願いしたものであり、砂堤列間低地のボーリング調査は、静岡大学人文文学部の機材を借用し、市原先生の指導で行ったものである。

記して感謝の意を表したい。

参 考 文 献

- 加藤 芳朗 「坂尻遺跡をめぐる地形・地質学的背景」 一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)埋蔵文化財発掘調査報告書『坂尻遺跡』・自然科学編 袋井市教育委員会・静岡県教育委員会・建設省中部地建 1985。
- 加藤 芳朗 『磐田の自然』「土地条件編」 磐田市史編纂委員会 1979。
- 加藤 芳朗 『伊場遺跡遺構編』「伊場遺跡をめぐる自然環境の地学的検討」 浜松市教育委員会 1977。
- 加藤 芳朗 『袋井市大畑遺跡』「第4章 大畑遺跡周辺の地学的背景と遺跡立地」 袋井市教育委員会 1981。
- 井関弘太郎 『考古学と自然科学』第8号 「沖積世後期の海水準変化と遺跡の地形環境」 考古学と自然科学 1975。
- 井関弘太郎 『沖積平野』 東京大学出版会 1983。
- 多田 文男 『地理学評論』19-1 「遠州灘沿岸横須賀付近の海岸地形」 1943。
- 市原 壽文 『日本考古学講座』2 人間と環境 「7 考古学的立地論」 岩波書店 1985。
- 大庭 章八 『袋井市史』通史編 「第一編 袋井市域の自然環境」 袋井市 1983。
- 柴田 稔 『青木、馬場第1、第2遺跡』 浅羽町教育委員会 1984。
- 柴田 稔 『青木遺跡、馬場第1遺跡、西立遺跡』 浅羽町教育委員会 1982。
- ※ 第14図の説明で7層を砂層としたが砂礫層のあやまりである。訂正する。

2 歴史的環境

浅羽平野南部は、縄文時代中期頃に陸地化した砂堤列と砂堤列間低地、および太田川・原野谷川の自然堤防、旧流路などから成り立っており、全体として海岸平野の景観を良く残している。

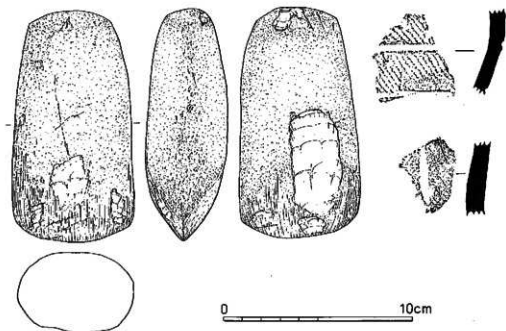
したがって、この地域での人間の生活が開始されたのは、それほど昔のことではない。

現在までに知り得た資料では、松山遺跡から出土した縄文時代後期の土器が最も古い時代の例である。

縄文時代の遺物は、松山遺跡のほかに、青木遺跡(土器片)、村前遺跡(剥片)、宮西遺跡(剥片)、権現山遺跡(石鏃)などから少量ずつ採集され、集落跡の存在を予測することは別の問題としても、関連する資料は普遍的に見ることができる。これらは、当地域が縄文時代には、生活領域の一部にとりこまれていたことを証明するものである。

弥生時代の遺物は、松山、青木、宮西などから採集されている。これらは、松山遺跡の太型始刃形石斧以外は土器である。また、現状では大集落を形成していたことが確認できる遺跡はない。

古墳時代には、青木遺跡で代表されるように、大型の集落跡が見られる。特に、4～5世紀には、平野の南部、北部において遺跡が急増する傾向にあり、平野の開発が急速に進展したことをものがたっている。



挿図 松山遺跡採集遺物

1.太型始刃形石斧(梅山 金原長平氏蔵) 2.縄文土器(梅山 岡本慎一氏採集)

権現山遺跡の東側に立地している地蔵山古墳は、そうした平野の開発に伴って出現した地域的政治集団の首長を埋葬した墓として位置付けることが可能であろう。しかし、一方では、当時の遠州灘にあっては安定した内湾を持つ浅羽平野は、舟運とも不可欠な関係が予測され、その観点も無視できない。

古墳時代以降、5世紀後半から6世紀前半や、9・10世紀など現段階では明確に把握できない時期がある。しかし、基本的には途絶えることなく発展を続けていることは前後の状況から充分に予測される。

それらの中で、先の地蔵山古墳や宮西遺跡から発見した8世紀の蔵骨器2点や権現山遺跡の蔵骨器などは特筆されるものであろう。

8世紀の蔵骨器は、人骨を伴った3点がいずれも土師器を容器としており、蔵骨器の実態を検討する上で、あるいは初期の火葬普及を検討する上で注目できる。

さて、当権現山遺跡は、主に11世紀後半から13世紀のいわゆる中世の遺構・遺物が発見されている。また、中世の遺構・遺物が発見される遺跡は、周辺にも少なからず存在する。そして、これらをたどると、おぼろげではあるが、中世の農村を眺めることができる。

この点については、後章で記すが遺跡の数の割りには中世頃までの文献に浅羽平野南部の地名が見られることが少ない。古代から中世にかけての文献に見られる地名や現象のうち、浅羽平野南部と関係が考えられる事例を挙げると次のようである。

① 長下郡通熊郷(ながしもぐんとうりくまごう)

和名類聚抄に登場する郷名である。内山貞龍の「遠江風土記伝」では、浅羽町内の同笠と考えられている。また、「續賀賀原始考」でも同様である。しかし、「静岡県史」では強いて言うならば、東浅羽地区であろうという見解と浜松市方面に比定する見解とに分かれている。ただし、その根拠は、平野南部の開発は和名類聚抄成立以後であろうという潜在的解釈であり、今日的には根拠とならない点も多い。

② 登勸神社(とろのじんじゃ)

風土記伝、県史共に長下郡通熊郷に所在すると考えられており、①の見解次第では、浅羽町南部のどこかにあった神社ということになる。

③ 貞蘇原神(まそはらがみ)

「日本三代実録」元慶2年2月16日条(872年)に遠江国貞蘇原神に従五位下を賜うという記事が見られる。この貞蘇原神は町内の松原に有ったと考えられることが多い。風土記伝では、町内の梅山八幡神社と考えられている。

④ 春日社

熊野速玉神社文書「遠江国銚保目録(1357年)」に春日社五十一石七斗九升七合とある。これは根拠は薄弱であるが、町内梅山春日神社の可能性がある。

⑤ 湊(みなと)

親元日記寛正6年8月2日条(1465年)に河井・堀越・中村・湊……という記事がある。ここでいう湊は町内の湊の可能性もあるが、当時は⑥の文献にあるように江河と呼ばれていた可能性が強く、横須賀湊のことであろう。

⑥ 江河(えがわ)

海老江文書永禄4年8月2日条(1561年)に江河とある。これは町内の湊であろう。地名が江川から湊に変わった時期は明確ではないが、江戸前期には湊の地名になっている。

⑦ 浅羽下村

④の文献中に浅羽上村・下村とある。この下村は、後段でも記すが、中畦堤の南側の村の総称であろう。なお、幸浦地区に通称下村と言う所があるが、これは明治初期以降に出来たものであることがほぼ確定である。

以上が中世の文書に表れる浅羽平野南部の全てではないであろうが、特に、11～13世紀の文献に浅羽町南部の記事が発見できないのは注目に値する。

さて、このような歴史的事実とは別に、中世の浅羽庄に対する用法に幾つかの種類のあることも注目できる。

第一の用法は、「吾妻鏡」養和元年4月30日条(1180年)などに見られるように、(浅羽)庄内柴村というように、庄名の下に村名を表すものである。この用法には、浅羽庄岡郷などもある。

第二の用法は、単に浅羽庄とする用法で、最も多く見られる。

第三の用法は、三浦文書天文9年8月1日(1540年)今川義元朱印状写のように、浅羽庄上村・篠谷・池村という用法である。同様の用法は、永禄4年(1561年)の海老江文書にも見られ、ここでは浅羽上村・下村となっている。

第四の用法は、海老江文書永禄3年7月20日(1560年)今川真氏判物のように、浅羽、柴、江河新田など郷もしくは村名として他の村名と並列で記されたものである。同じ海老江文書の永禄4年の真氏判物では、浅羽、柴、江河、和口、大淵、中之村、戸羽野、興洲(沖之須)が並記されている。

以上のような四つの用法を見ると、浅羽庄は、少なくとも16世紀には、上・下に大きく分けて見られていたことがわかる。この場合、江戸時代の文書を参考にすれば、中畦堤を境とした区別と見ることができる。一方この時期には、浅羽という狭義の地名もあり、それは、柴でないことがわかる。さらに、浅羽庄の下に付く地名は全て上村の地名であることも理解できる。

このように見て行くと、浅羽庄司が遠江守護の安田義定の訴えによってまず先に収公されたのは柴であった(1181年)ことが問題になる。

従来から浅羽庄司の居館は柴にあったという説が支配的であり、この説に従う限り、1181年に浅羽氏は、その本貫地を収公されるという大打撃を受けたことになる。そして、この地は、1347年頃には柴氏の勢力下にあった可能性が高い。このことが明確になるのは、1539年の三浦文書である。この時、柴氏は、「……柴小次郎屋敷分 井篠谷……」を今川義元に没収され三浦宗次郎の

所領となっている。

このように、柴村あるいは柴郷は、浅羽氏が収公されて以来浅羽氏の下に戻ることはなかったようである。

また、16世紀には、柴と浅羽が並記されている事実を見ると、柴以外の場所に浅羽氏の本貫地があった可能性は高いと見なくてはならない。この場合、先の第四の用法で示したように、文書に全く表れないにもかかわらず、中世の遺跡が多数確認されるばかりか、馬場遺跡のように、有力な居館跡が予測される町内の松原、梅山などは、かえて浅羽であった可能性を強くしてくる。

先に記した中畦堤は、町内の一色から南下し、初越、松原、梅山の北縁に添って築かれた堤防であるが、原野谷川の自然堤防を利用したものと考えられ、浅羽上・下村の成立する中世には確実に成立していたと見ることができる。この堤防は、上村にとってはなんの利益にもならないものであったことは、江戸前期の「原家文書」でも知ることができる。このことは、それが築かれた後ろには、下村に強い勢力が存在したと見ることもでき、先の浅羽庄再検討ともかわる問題であろう。

歴史的環境とは少し違った内容を記したばかりか、門外の方野に発言することになったが、遺跡の調査から地域史を組立てる立場の疑問点を記して見た。

なお、引用した文献は、「袋井市史」「浅羽鳳上記」「静岡県史」など容易に入手できる刊行本である。また、口碑伝承のたぐいは意識して資料としていない。

VI 遺跡の概要

権現山遺跡は、先の地理的環境、歴史的環境でも記したように、浅羽町南部の砂堤上に立地する遺跡である。現海岸線からは、北へ約2kmの地点にあり、周辺は広大な水田地帯である。

現在は、遺跡の西側には、自動車部品製造の工場が建ち、大型農道が東名高速道路袋井インターチェンジへと直結し、さらに森町までのびている。また、今回の圃場整備事業で、第5図に示したような地形は大きく変更され、砂堤を外見から復元しようとする作業などは、ほとんど不可能な状態になっている。

また、字界の変更なども近い将来には実施されるであろうし、農村部でさえも中世の集落研究は今までのように外見だけでは困難な時代が近づいている。

本遺跡は、浅羽町遺跡地名表では、権現山遺跡と宮ノ腰遺跡とに分けてあるが、本報告書では、前者をGN地点、後者をMY地点とし、両者を合めて権現山遺跡と呼ぶこととした。

しかし、MY地点は、第V砂堤に立地し、GN地点は第VI砂堤に立地しており、従来の考古学の考え方からすれば、両者を個々の遺跡として扱うべきものと理解しているが、本調査の結論から見れば、全てに中世の園宅地が発見され、中世という時期に限って見れば、中世の松原集落の一部でしかなく、その単なる地点と見ることも間違いないと言えない。また、その観点に立てば、権現山遺跡という名称も大した意味は持たないことにもなる。

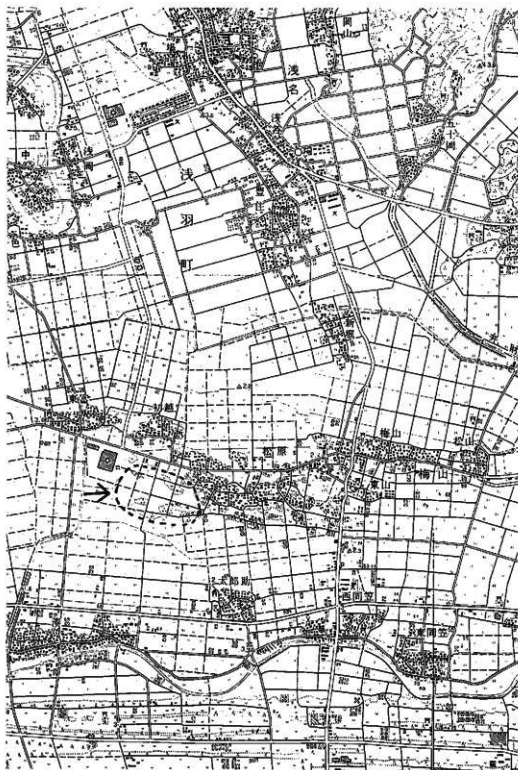
この遺跡の名称に対する問題は、近年各地で見られるが、自然堤防上の遺跡のように、延々と数kmにもおよぶ手の付けようのない体を見せているものも少なくない。遺跡群の概念を明確にし、その中で捉えるのが正しい理解であろう。

ここでは、その点にはふれないが、中世集落などは、小字を遺跡名にするという前提は殆んど意味を持たないように思う。

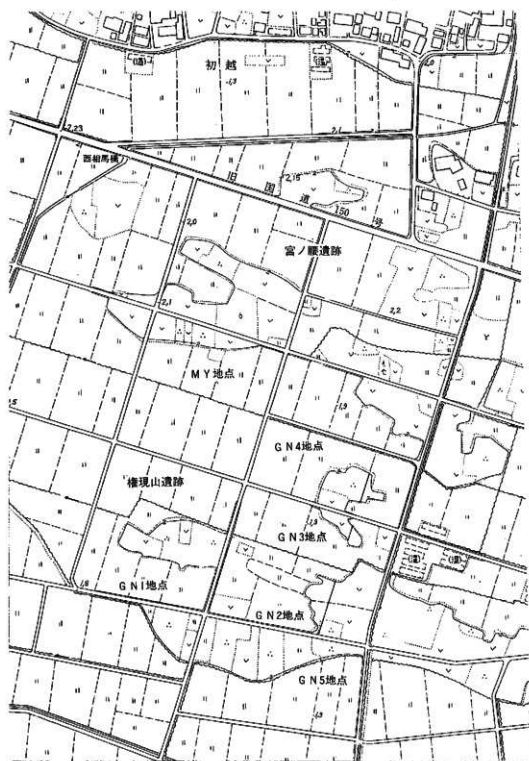
調査は、圃場整備事業で包含層、あるいは遺構が破壊される恐れのある場所に限って行ったため、水路新設箇所と畑の除去(畑寄)箇所だけがその対象となった。このため、調査箇所が点在することとなり、それぞれに地点を設定した。

各地点の概要は、個々の地点の記述の中で行うが、その位置は、第5図に示した通りである。

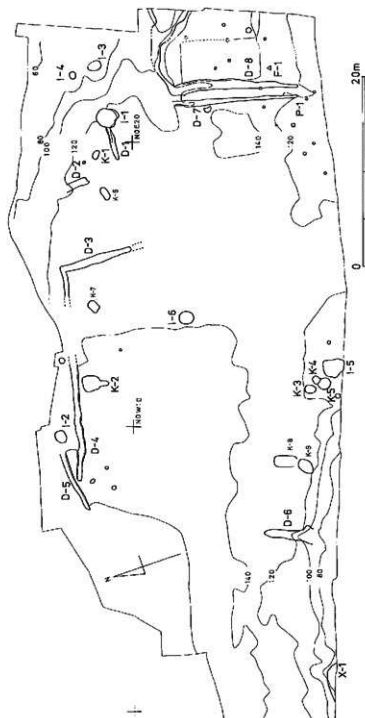
また、第1図は、第5図と同じ地形図から作成したものであり、それをも参考にして欲しい。



第4圖 權現山遺跡位置圖



第5図 各地点の位置



第6図 GN1地点遺構配置図

1 GN1地点

1. 地点の概要

当地点は、権現山遺跡の立地する砂堤列の最西端にあたる。現況では独立した微高地になっているが、以前はGN2地点へ連続していたものであり、その名残が畑の取り跡である不整形な水田で見ることができる。

現況は、主に茶園であり、最高所で海拔2.35mである。

北側にはMY地点の砂堤列との間に、幅約140mの砂堤列間低地があり、南側には、幅約30mの浅谷がある。前者の低地は、当地点から約50m北側で、基層となる砂層まで水田面から約2.15mあり、海拔では、マイナス約1mである。一方、当地点の高い部分では、海拔約1.1mで砂層となり、その差は約2.1mである。また、砂堤の高い部分は、GN2地点に比較すると、約0.4m低い。一方、無遺物層は、GN2地点が、海拔約1.6mから下であるのに対して、当地点では、海拔約1.5mからであり、その差は少なくなる。

遺構は、海拔1.5から0.7m付近から検出されるが、海拔0.8m以下に発見面を持つ遺構は、無遺物層を掘下げた結果検出したものである。

検出された遺構には、溝状遺構、井戸状遺構、土坑状遺構、小穴群、火葬墓（蔵骨器）、その他がある。

採集した遺物は、平安末から鎌倉時代の陶器、土師器、陶・土甕等であるが、古墳時代の須恵器、奈良時代の須恵器なども少量出土している。

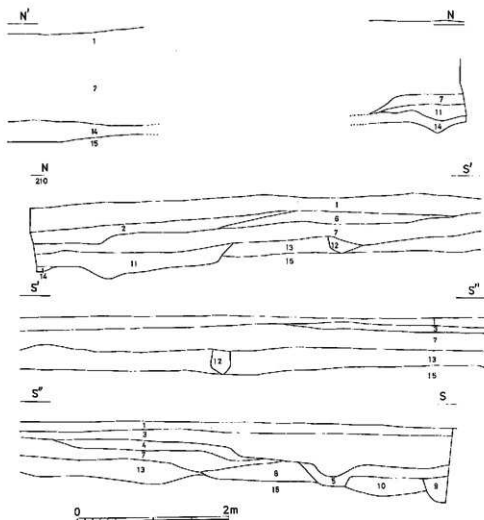
1) 基本的層位

第5図は、発掘区の東壁の断面であるが、N-S間は農道の部分に当たるため、畑面の地表より表面が約0.4m低い。また、砂堤が減少になる部分のため、両側に明瞭な客土の層がある。

基本的には、他の地点と同様で、褐色の砂質あるいは粘質土の厚い層の下が、茶褐色の砂質粘土層となる。この層の上半は無遺物包含層であるが、無遺物層と分層できないほど類似している。

また、奈良時代の蔵骨器は、海拔約1.5m付近に発見面があるが、下部だけを残して削り取られており、その破片は周辺に散乱し、平安末の陶器などと混在していた。この現象は、他の地点でも観察できるが、奈良時代以降に砂堤の高い部分が削られ、その後改めて堆積したことがうかがえる。

砂堤の北・南側は、低地堆積である有機質層が見られる。低地では、無遺物層になるまで、鎌倉時代の遺物を含んでいる。第14層が低地での無遺物層であるが、この層は、GN2地点の所見に基づけば、BP2,300±90年 (^{14}C 測定) という年代が与えられている層であり、その直上の層から鎌倉時代の遺物が出土することを考慮に入れると、明らかな時間的断続を見ることができる。



土層説明

1. 耕作土 2. 黄灰色粘土（細寄土） 3. 灰色粘土（細寄土） 4. 暗褐色粘質砂（遺物が多く含まれる）
5. 暗褐色粘質砂（遺物が少ない） 6. 褐色粘質砂（7層と同一層？） 7. 茶褐色砂質粘土（包含層）
8. 暗灰色粘質砂（7層と同一層？） 9. 黒褐色砂粘質砂（13世紀の陶器を含む） 10. 暗茶褐色粘質砂
11. 暗褐色粘質砂（D-8内堆積） 12. 黒褐色粘質砂（小穴内堆積） 13. 茶褐色粘質砂（無遺物）
14. 黒褐色有機質砂（泥炭状の部分もある） 15. 黄褐色中粒砂（低地部では灰色砂）

※ N'-N間とN-S間は、若干ずれた位置での断面図を合成している。

第7図 GN1地点土層断面図

2) 各遺構の概要

A 溝状遺構

D-1 I-1に隣接し、これと関連するとも思える。幅約0.45m、長さ約3.5mで、I-1に向かって徐々に深くなり、I-1の直前で深さ約0.1mとなる。断面はかまぼこ形である。内部の堆積土は、暗褐色粘質砂である。

遺構発見面は、海拔約1.4mである。

遺構内からは、遺物が採集されず、時期は不明である。

D-2 北側の低地に向かって深くなりながら消滅する不整形な溝である。幅約0.8m、長さ約4.5mで、深さは最高で約0.1mである。内部の堆積土は、暗褐色粘質砂である。

遺構発見面は、海拔約1.3mである。

採集遺物は皆無のため、時期は不明である。

D-3 L字状に屈曲する溝である。D-4と本来は連続していたものであろう。また、S2ラインの断面では、茶褐色粘質砂内に確認されており、南にも延びていたものであろう。

NOW9付近から北に約7.5m進んでから、90度屈曲して西に約3mまで確認できる。幅は約0.5～0.8mで、深さは深い所で約0.1mである。内部堆積土は、暗褐色粘質砂である。遺構の発見面は、海拔1.3mである。

遺構内からは、平安後期から鎌倉前期の陶器が出土している。

D-4 N6W3からN5W16付近に検出される。長さ約12.5m、幅0.6～0.7m、深さ約0.15mである。内部の堆積土は、暗褐色粘質砂である。遺構発見面は、海拔約1.45mである。

遺構内からは、少量の鎌倉時代の陶器が出土した。

D-5 D-4に隣接している。長さ約6.5m、幅約0.5m、深さ約0.1mで、北側低地に達してから確認できなくなる。内部の堆積土は、褐色砂質粘土で、遺構の発見面は、海拔約1.4mである。

出土遺物は皆無であるが、堆積した土からは近世の可能性もある。

D-6 等高線に直交して南側低地にぬける。長さ約6m、幅は最大で約1.5m、深さは、深い所で約0.5mである。内部には、暗褐色粘質砂が堆積し、発見面は海拔約1.25mである。

出土遺物は少量の陶器であり、年代は鎌倉前期である。

D-7 D-8とはほぼ平行し、砂堤に対して直交している。幅約0.5m、深さ約0.2mで、長さは約13mであるが、南北共に途中で確認できなくなる。内部には茶褐色砂質粘土が堆積し、発見面は、海拔約1.4mである。

出土遺物はすべて小破片であるが、平安後期から鎌倉後期の陶器、土師器である。

D-8 D-7の東側約1mの所にあり、D-7と平行しているが、D-7が確認できなくなる付近で、直角に東へ屈曲し低地にぬける。東に屈曲してから約8mで調査用地外となる。幅は、D-7と平行している間は約1mであるが、東に屈曲してからは徐々に広くなり、東端では約4

mである。遺構内には、茶褐色砂質粘土が堆積しているが、低地に近い所では暗褐色粘質砂となる。

遺構発見面は、海拔約1.4mであるが、低地に近づくと1.1m程度になる。深さは、様々であるが、底面は低地に向かって低下し、東端では海拔約0.6mである。

出土遺物は、D-7と同様である。

B 土坑状遺構

K-1 最大幅約70cm、長さ約60cmの卵形の土坑である。深さは、土坑確認面から約12cmであるが、土坑に伴出した遺物から見ると、最低でも30cmはあったと考えることができる。

遺構発見面は、伴出土器の検出面と考え、海拔約1.7mである。

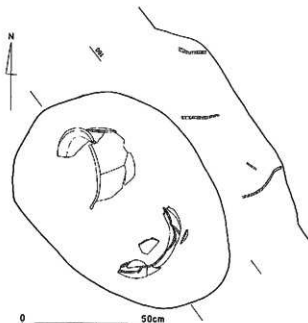
この遺構は、無遺物層である茶褐色砂質粘土層を掘下げる過程で突発的に遺物が出たもので、土坑は、遺物発見後に検出された。この遺構の検出で、無遺物層をある程度掘下げないと検出できない遺構があることがわかった。発見面の低い遺構の内には、そうした作業の結果によるものが含まれている。

内部の堆積土は、茶褐色砂質粘土であり、周辺の層と変化する。しかし、土坑の床面は砂層であったため、輪郭だけはつかむことができた。

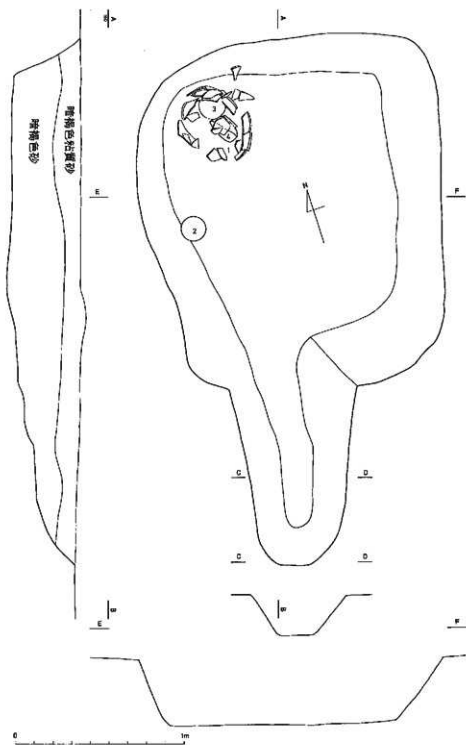
土坑に伴出した遺物は、平安時代後期の鉢で、ほぼ完形品である。

出土状態は、大きく二つのブロックに別れており、西側のものは口縁部を下にし、東側のものは上にしている。これは、どちらかが原位置を保っていると考えたいが、当面は口縁部を下にした方を原位置にあると考えて置く。

K-2 短径約160cm、長径約187cm、深さ約36cmの隅丸長方形の土坑の南側短辺に、取り付け部で幅約68cm、深さ約30cmの溝が接続している。この両者が関連しないという立証ができないので、二つで一連の遺構と考える。



第8図 GN1地点K-1実測図



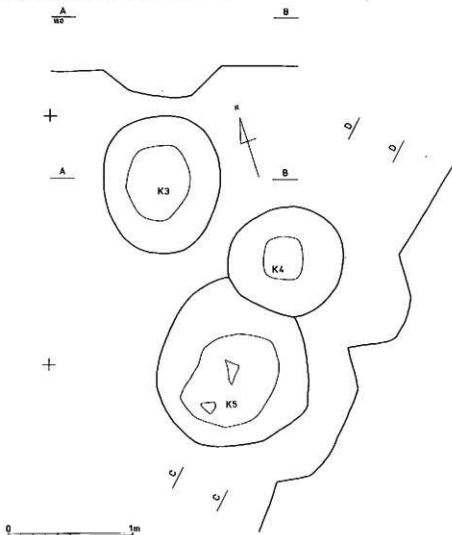
第9圖 GN1地点K-2実測図

遺構の発見面は海拔約1.45mであり、この面では暗茶褐色粘質砂が堆積し、土鍾1点が検出された。土坑の下部は、色調の明るい暗褐色砂であり、壁および床を構成している砂層との区別は簡単ではなかった。

出土遺物は、鉢(1点)、碗(3点)であり、いずれも完形品である。また、人骨(頭骨)が鉢の中で確認された。

鉢は、口縁部を下にして床面に密着しており、伏甕という表現がふさわしい。この鉢の中に2個の碗が、上向(Na 3)と横向(Na 4)とで置かれており、頭骨は、鉢と碗との約30cmの透間にはば完全に残っていた。しかし、保存はきわめて悪く取上げはできなかった。また、他の1点は若干離れている。これらの内、Na 4は輪花碗である。

出土遺物から平安後期の墳墓と考えられる。



第10図 GN1地点K-3～5実測図

K-3 短径約95cm、長径約110cm、深さ約26cmのほぼ円形の土坑である。

発見面は、砂層に達しているため海拔約1.2mであるが、1.4m付近から掘込んでいる可能性が高い。

内部の堆積土は、暗褐色砂質粘土である。

出土遺物は、平安末から鎌倉後期の陶器、土師器である。これらの内平安末に属する碗1点と鎌倉後期に属する小皿1点は完形品である。

K-4 K-3に隣接しており、K-5とは一部重複している。

径約92cm、深さ約37cmの円形土坑である。

堆積状況などは、K-4と類似している。

出土遺物は、平安末から鎌倉後期の陶器、土師器であるが、底部穿口の常滑焼の破片が含まれている。また、破片の多くは平安末頃のものであるが、常滑焼は鎌倉後期と思われる。

K-5 径約125cm、深さ約28cmの円形土坑である。

堆積状況、出土遺物などは、K-4と極めて類似しており、当土坑からも底部穿口の常滑焼破片が検出されている。

K-6～9 暗褐色砂質粘土の落込みとして発見されたが、遺構といえるかが定かでない。単なる地形の窪地の可能性も少なくない。

C 井戸状遺構

1-1 短径約180cm、長径約240cm、深さ約75cmの不整円形である。井戸枠の痕跡は見られず、素掘りと思われる。底面は海拔約0.3mであり、発見面は海拔約1.1mである。

内部の堆積土は、木屑などの有機物を含む黒褐色細砂であるが、底面付近には砂層の噴出が多く観察できた。

出土遺物は少量の陶器、土師器、自然石、木屑などである。これらの内、時期の判定できる資料は平安後期の陶器である。また、自然石は石墨片岩などで、周辺では採集できない程度の大きさがある。

井戸使用の時期は、平安後期であり、完全に埋積した時期は、平安末であろう。

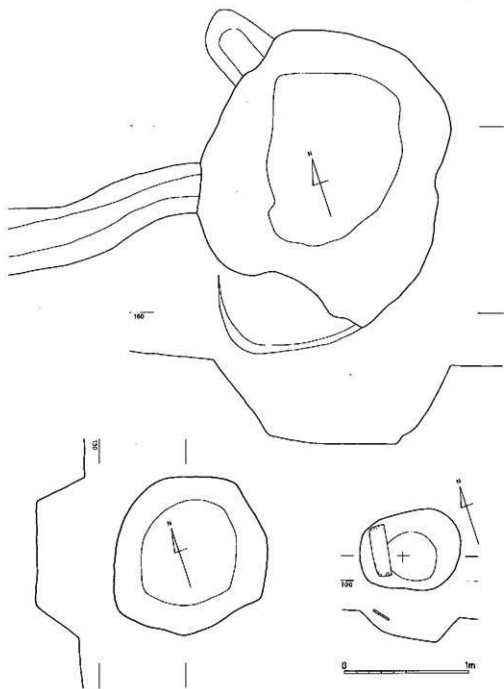
1-2 径約125cm、深さ約40cmの円形井戸である。発見面は、海拔約1.2mであり、底面は海拔約0.8mである。ただし底面に関しては、極度の湧水のため不明確である。

内部の堆積土は、暗褐色砂である。

出土遺物は極少量であるが、陶器、土師器がある。これらの内、時期の判断できる資料は、平安末から鎌倉前期の陶器である。

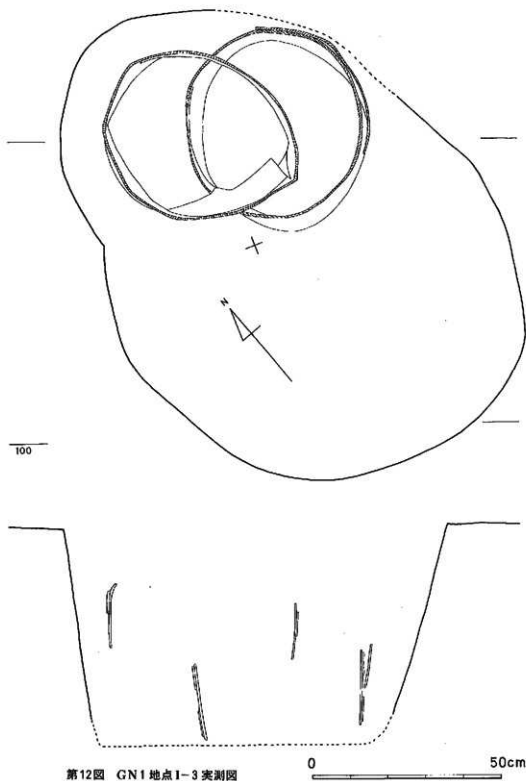
使用された時期は、おおむね鎌倉前期と考えている。

1-3 北側低地の無遺物層を若干下げたところ、砂層の噴出が見られたため掘下げたところ井戸枠が発見された。井戸枠は、径約48.5cm、高さ約20cmの曲物2個を重ね合わせたものであるが、上下が大きく横へずれている。



第11图 GN1地点1-1·2·4实测图

上. 1-1, 左下. 1-2, 右下. 1-4



第12圖 GN1地点1-3実測図

井戸枠を納めた土坑は、長径約140cm、短径約105cmの楕円形であるが、極度の湧水のために明確でない。土坑の発見面は、海拔約0.8mであり、井戸枠の発見面は海拔約0.63mである。また、井戸底面は、井戸枠底部とすれば、海拔約0.22mである。

内部の堆積土は、褐色砂に木屑が混入したものであり、他の井戸と比較すると有機質が少ない。また、後込めは、褐色砂を用いている。

出土遺物は4片の陶器破片であり、時期は鎌倉前期から中期であろう。

井戸の使用時期もこの時期と考えている。

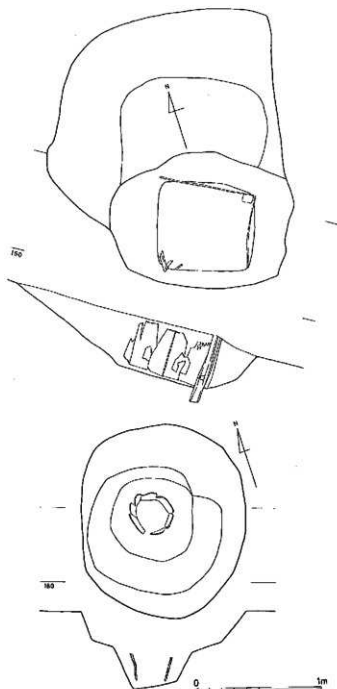
1-4 長径約80cm、短径約65cm、深さ約20cmの土坑である。発見面は海拔約0.75mであり、底面は海拔約0.5mである。

内部から曲物の底が半分出土している。

井戸といい得るか疑問であるが、堆積状況が1-3と類似していることから、一応井戸としてあつかう。

使用の時期は不明であるが、平安末から鎌倉の中で考えている。

1-5 長径約225cm、短径約190cmの不整形な土坑であり、北側から階段状に低くなる。井戸枠は、この南端の一番低い所から検出された。



第13図 GN1地点1-5・6実測図
上. 1-5, 下. 1-6

土坑の発見面は、海拔約1.3mであり、井戸枠は海拔1.2mに発見面がある。

井戸枠は、板材と建築用材とを利用して作られていたようであるが、全体の約半分が残存していた。隅には8×7cmで、臍穴が掘られた角材を約13cm打込み、これに添わせるように板材が縦に並べられている。また、井戸枠の検出できなかった部分も、おおむね井戸枠と思われる部分に若干の有縁物がみられた。これによると、角井戸の形態であったことがわかる。

井戸の底面は、海拔約0.75mである。

井戸内からは、奈良時代の須恵器細片1点の他、平安末の陶器、土師器などが出土しているが、鎌倉後期と考えられる小皿の完形品1点が含まれている。

1-6 長径約155cm、短径約132cm、深さ約60cmのほぼ円形の土坑として検出されたが、底面に井戸枠が残存していたことから井戸と考えた。

土坑はいわゆる二段式になっており、発見面から約25cm下がった位置に、若干内傾する平坦面があり、この部分では径約62cmの土坑となる。ここから数cm下がった所に、径約33cm、深さ約22cmの桶状の井戸枠が検出された。保存が良くないため、不明瞭な点もあり、例貫き材の可能性もある。

井戸底面は、海拔約0.8mである。

出土遺物は極少量の須恵器、土師器であり、時期の判定ができるものは平安末から鎌倉前期である。

井戸の使用された時期は、鎌倉前期から中期であろう。

D 小 穴 群

P-1 発掘区南東端付近から16個の小穴が検出された。これらは主として南側低地との境付近から検出できる。また、とくに規則性は見られないが、強いて主張すれば南西—北東の方向性を持つ2列の標と見えなこともない。

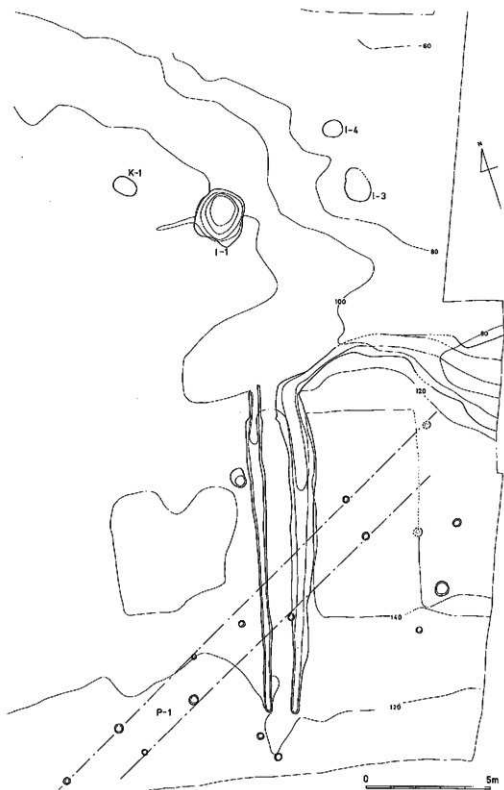
小穴は、径15~30cmのものが多く、深さは10~30cmである。また、発見面は、海拔1.1~1.4m前後である。

この小穴は、第5図で見られるように、遺物包含層を全て除去しないと検出できず、層位的には古い要素がある。時期の判断ができる資料が出土していないため、その時期を明確にすることはできないが、D-7・8などよりは古く考え、平安後期と見たい。

その他、発掘区の各所から1~3個の小穴が検出されているが、性格はまったく不明である。

E 蔵 骨 器

F-1 第5図の7層である茶褐色砂質粘土の最下部に発見面があり、人骨、蔵骨器上半は周辺に散乱していた。検出状況のまま取上げてあるが、残存しているのは下約10cmである。蔵骨に用いられたのは、土師器の長甕であり、高さは30cm前後に復元できるため、20cm程度は削平されていることになる。また、周辺に散乱していた人骨、蔵骨器片とは平安後期の陶器が混在しており、この時期頃に地表に露頭したものが改めて埋積したと見ることができる。



第14図 GN1地点東端部遺構配置図

蔵骨器の時期は奈良後半と考えられる。また、蓋と考えられる遺物は検出されていない。

F そ の 他

X-1 発掘区南西端付近に確認調査グリットを設定し調査した時にグリット内から奈良時代の須恵器2個体が出土した。本調査では同一個体の破片1点が採集されただけである。グリット内ではとくに遺構は検出できなかったし、本調査でも周辺は鎌倉時代頃の包含層であった。

グリットの断面は図示したが、遺物が出土したのは6層の最下部であり、 2×2 mのグリット全体に散乱するように検出された。また、発見面は海拔約0.6mである。この層は、各所で確認されている低地堆積の包含層であり、その下の7層は、GN2地点の資料を基に ^{14}C 測定を行った結果BP2300 $\pm$ 90年という測定値を得た層と同一のものである。

古墳から奈良時代の遺物が、ほぼ完形に復元できる状態で中世の層の最下部から検出される例は、MY地点などでも少なからず見られるが、何らかの遺構が存在したためではないかと考えている。

3) 各遺構のまとめ

遺構は奈良時代以降の例が調査されたわけであるが、これらは極めて単発的である。これらの内、奈良時代の例は、地蔵山古墳群の一部と考えて良いものであろう。また、平安後期の墳墓については個別でしか理解できないのが現状であるが、I-1が平安後期と考え得る前提に立てば、中世集落の一部と考えることも可能である。

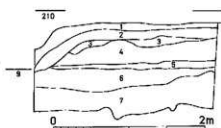
各遺構の性格については、D-1・2・6などは、低地に向かって自然に成立した浅谷と考えている。また、K-6～9は、自然の窪地であろう。したがって、これらは遺構とは言えないのかも知れない。

溝状遺構の内、D-3・4、D-7・8は、それぞれ関連し、園宅地の一部と考えているが、その時期は鎌倉後期頃であろう。

土坑状遺構の内、K-1～5は墳墓の可能性が極めて高いと考えられる。

また、小穴群を欄列と考えた場合、これらは平安後期から鎌倉の園宅地の一部であり、I-1、K-1・2などと関連する可能性が高い。

井戸状遺構は、基本的には平安後期から鎌倉時代を通じて、それぞれに所属する園宅地があると考えられる。



土層説明

1. 耕作土 2. 褐色砂(畑寄上)
3. 黄褐色粘土(畑寄土)
4. 淡暗褐色粘質砂
5. 黄褐色砂質粘土(旧水田床土)
6. 黒褐色有機砂(最下部から奈良時代の土器)
7. 黒褐色有機粘土(黒褐色粘土と黒褐色砂がブロック状に混合、管鉄が多い)
8. 暗黄褐色砂 9. 現水面

第15図 GN1地点 X-1付近断面図

2 GN2地点

1. 地点の概要

当地点は、GN1地点と同・砂堤上にあるが、現況では、両者の間には水田となり、分断されている。また、この分断されている部分は、GN1地点でも観察できたように、砂堤が極端に狭くなっていたようである。

現況は大半が茶園であり、表面からの観察では遺跡の様子は全くわからない。

畑面の最高所は、標高約2.4mであるが、「しんげん山」という通称があり、かつては、この付近では高い場所であったようである。

遺構は、標高1.4から1.0m付近から検出されるが、断面から見ると、最高所では、標高1.6m以下は無遺物層であり、本来はもう少し高い位置から遺構が検出されるのであろう。

検出した遺構は、溝状遺構(D-1~3)、土坑状遺構(K-1~3)、井戸状遺構(I-1)、小穴群などである。

また、出土遺物には、少量の古墳時代前期の土師器、古墳時代後期の埴輪、奈良時代の須恵器が含まれているが、大半は平安から鎌倉時代の陶器、土師器、陶鉢、土鍾などである。

1) 基本的層位

第16図に示したように、基層は、細石混じりの中粒砂であり、最高所では、標高約1.5mで検出できる。

砂層の上は、上に行くに従って徐々に粘土質の強くなる砂質粘土あるいは、粘土質砂であるが、砂堤列間低地に向かって傾斜を始める北側と南側では、有機質の強い砂あるいは粘土が堆積している。この、低地堆積の状態が明瞭になるのは、標高約1.4m以下である。

また、低地堆積した層は、無遺物層に達するまで鎌倉時代の遺物を包含している。

砂堤上の砂層の上面の約15cmは、暗褐色の粘土質砂層が見られ、この層は、無遺物である。

1~8層は、遺物を包含しているが、8層の下部からは遺物が検出できないため、この部分は、9層に対応する可能性が高い。9層は、北西に向かって低下し、厚くなる。この層と砂層との境は、凹凸が激しい。また、9層の¹⁴C測定値は2300±90年B.P.であり、その堆積時期は、7層に比較して極端に古い。

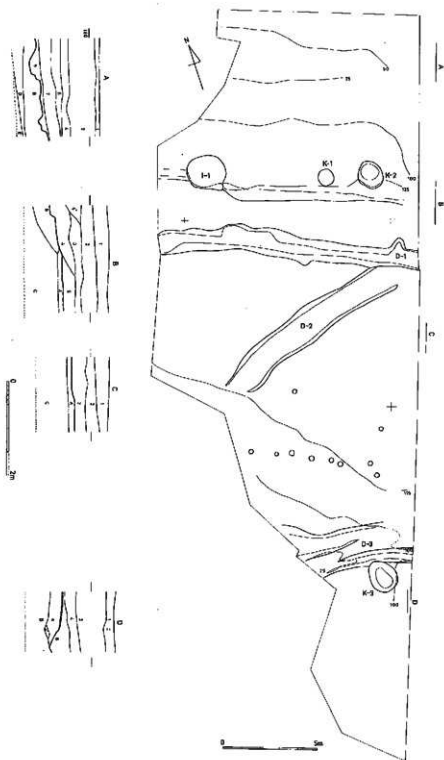
2) 各遺構の概要

A 溝状遺構

D-1 調査区を横断するように検出され、北側の砂堤列間低地とほぼ平行している。

幅1~1.5m、深さ約0.2mで、底面は、砂層に達している。内部の堆積土は暗褐色砂質粘土で、A層に似ている。

構内からは、少量の遺物が出土しているが、これらの内、時期の判定が可能なものは、平安末から鎌倉前期である。



第16圖 GN 2 地点全体圖

第16図 各土層の状況

1. 耕作土 2. 褐色砂質粘土(少量の炭化物、軽石を含む) 3. 茶褐色砂質粘土(2と類似、少量の軽石を含む) 4. 褐色粘土(A断面では砂質が強い、少量の軽石を含む) 4'. 黄褐色砂(4層の部分堆積) 5. 暗褐色砂質粘土 6. 灰黒色有機砂(黒色砂の中に灰白色砂が混じり、泥炭質が強い) 7. 黒褐色泥炭混じり粘質砂(ヤマトシジミの地点貝塚を含む) 8. 黒褐色粘質砂(7層に対応する) 9. 黒褐色泥炭混じり細砂(無遺物) A. 暗褐色粘質砂(無遺物、3・5層に類似) A'. 暗褐色細砂(Aと同一層) B. 黄褐色中粒砂 C. 黄灰色中粒砂 D. 灰色中粒砂 E. 灰黒色中粒砂
※ 2・3・4・5層は、極めて類似した層である。

アルファベット記号の層は砂堤の基層

D-2 発掘区を斜めに通過している。幅約1.6m、深さ約0.1mで、褐色粘土が堆積している。

出土遺物は皆無であり、堆積している土は、3～4層に類似し、近世の遺構の可能性が高い。

D-3 砂堤の南側低地から検出された。極めて不整形で、人為的なものかもわからない。幅約2.1mであり、深さは西に向かって深くなり、見掛けでは約0.2mある。内部の堆積土は、黒褐色粘質砂で、8層と類似している。この意味からも、8層の堆積した低地の窪みとも考えられる。

出土遺物は極少量であるが、鎌倉中期の陶器がある。

B 土坑状遺構

K-1 北側の砂堤間低地に移行する部分から検出された。径約0.9m、深さ約0.1mの円形で浅い凹地のような土坑である。内部には、黒褐色粘土混じり砂が堆積していたが、これは、7層と極めて類似した層である。

出土遺物は皆無のため時期は不明である。

K-2 K-1に隣接して発見された。径約1.3m、深さ約0.2mの円形土坑である。内部の堆積土は、上層には黒褐色砂が見られ、下層は、灰黒色砂である。

出土遺物は、下層から鎌倉後期の陶器が出土している。

K-3 南側低地のD-3と一部重複して検出された。短径約1.5m、長径約1.8m、深さ約0.3mの卵形土坑である。堆積土は、D-3と同様黒褐色粘質砂である。

出土遺物は皆無である。

C 井戸状遺構

I-1 北側低地移行部から発見された。4層を除去した段階で検出された。発見面は、標高約1.4mである。発見した時点では、径約0.8mの円形土坑と考えられたが、調査にしたがって大きくなった。これは、基層の砂層と見えた灰色砂の中に、部分的ではあるが、有機物が何層もの薄層として含まれていたためである。

約0.7m掘下げた段階で、曲物の井戸枠が検出された。この井戸枠から下は、極度の湧水で砂

層が崩壊するため、調査不能となった。

井戸枠は、直径約50cm、高さ約45cmで、当初から井戸枠を意識して作られた曲物である。また、井戸枠の東側には、曲物の底半分が土留のように差込まれていた。

井戸底面は、曲物の終わる位置と考えて、標高約25cmである。

井戸枠内の堆積土は、殆んどが灰色中粒砂で占められ、極少量の有機物が含まれていただけであり、湧水と共に噴出した砂で埋積したことを証明している。

出土遺物は極少量である。特に、確実な井戸内からは、時期の決定できる資料は得られなかった。しかし、井戸枠の後込めから平安末の陶器が出土している。

D 小 穴 群

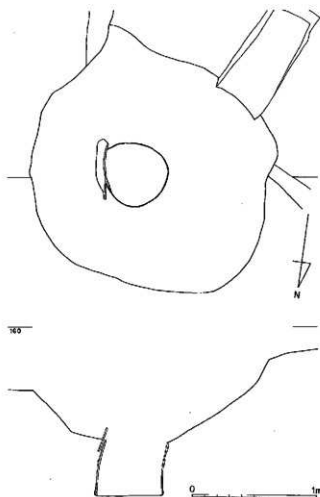
南側低地への移行部に10個の小穴が検出された。このうちの2個は飛び離れているが、他は、ほぼ一列に並んでいる。穴の径は、20~30cm、深さは、10~20cmである。内部の堆積土は、いずれも暗褐色粘質砂である。

これらは、櫛列の一種と考えているが、出土遺物がなため、時期は、相対的に平安末から鎌倉時代と考える以外に方法がない。

E そ の 他

北側低地の8層から小規模な貝塚が検出された。これは、ヤマシジミを主体としたものであるが、ちょうど発掘区東端の断面から検出され、土砂崩れで崩壊したため、図化できなかった。

また、D-2の南側からは、埴輪の破片、北側低地からは、古墳前期の土師器が出土したため、遺構の検出にも努力したが、成果は得られなかった。



第17図 GN2地点I-1実測図

3) 各遺構のまとめ

GN-2 地点の遺構は、以上のものであるが、これらは、D-2 を除くと平安末から鎌倉時代の遺構と見て良いであろう。しかし、これらを組合わせてどのような遺跡と考えるかは、躊躇せざるを得ない。ここでは、建物跡が検出できなかったことは、最大の難点としながらも、中世の閑宅地の一部と考えたい。



第18図 GN 3・4 地点完掘実測図

3 GN3・4地点

1. 地点の概要

当地点は、GN2地点の北側約30mにある。GN2地点との間は、同地点で北側低地と呼んだ低地によって隔てられている。現況では、独立した微高地のように見えるが、本来は、東側は砂堤に連続していた可能性が高い。しかし、GN3・4地点の現況で見られる東側の馬蹄形の水出は、GN4地点南東側で低地として確認されており、砂堤として東側に連続していたとしても、極めて細く続いていたと考えられる。また、さらに東に続くと、基本的にはGN2地点と同一の砂堤となる可能性が高い。こうした場合には、GN2地点とGN3地点との間にある低地は、砂堤間低地と言うよりは、砂堤が成立した後に侵食された浅谷と見た方が良いのかも知れない。ここでは、GN2地点と同一の砂堤に属すると考える。

現状は茶園であり、最高所は標高2.4mである。

遺構は、標高1.6～1.4m付近から検出できるが、弥生時代の遺構は、平安時代の遺構とほぼ同一レベルから検出される。また、奈良時代以降の遺構も、ほぼ同一面から検出されるが、奈良時代の遺構は、平安から鎌倉時代頃までに、ある程度削平されていたようである。

遺構には、弥生時代の周溝墓、奈良時代の土坑状遺構、平安時代の溝状遺構、平安から鎌倉時代と思われる小穴群、小規模な鎌倉時代の貝塚がある。また、奈良時代の蔵骨器らしいものもある。

遺物は、大半が平安から鎌倉時代の陶器、土師器であるが、縄文時代の石鏃、奈良時代の須恵器、土師器も少量検出されている。

1) 基本的層位

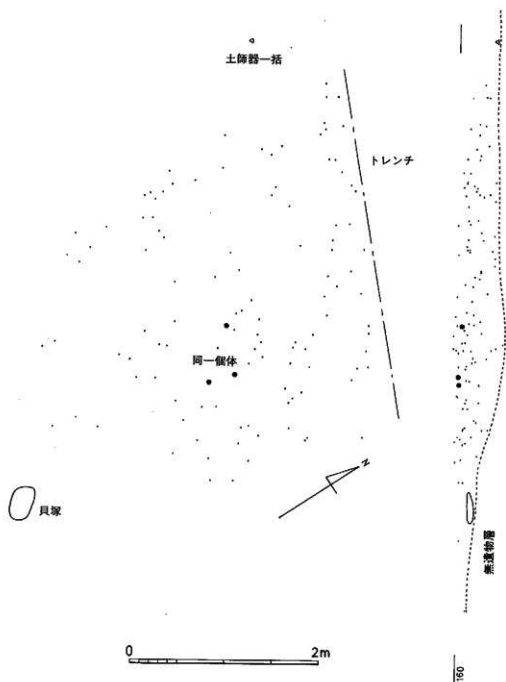
層位は、GN2地点と全く変わらないが、良好な断面を得ることができなかった。

第19図は、GN3地点の低地から出土した遺物のドットマップである。ドットで示した遺物は、鎌倉時代の陶器、土師器、陶・土鏃である。また、3個の●記しは、一個体に接合できたものであり、ハ記しは遺構に伴った可能性があるものである。

この付近は、標高約1.5mまでは茶褐色砂質粘土であるが、徐々に砂質が強くなると同時に黒褐色になる。しかし、GN4地点の南東側低地や、GN2地点の低地のように有機物を多く含み、黒色にはなっていない。多分もう少し低い位置になれば、それらと同様な地積となるのであろう。

しかし、遺物の発見できる下限を見て行くと、小規模な貝塚が検出された付近が標高約1.4mで無遺物となるのに対し、それより西および南では、標高約1.25mまで遺物を検出でき、僅かな低地であることが理解できる。また、GN2地点の南側低地と同様、低地の底面は急速に低下することではなく、遺浅の状態である。

この低地は、概ね鎌倉時代の内に微高地から低地に向かって、約3.5mは埋積が進み、標高約1.6m程度の高さで平地化していたことも同時に理解できる。



第19図 GN3 地点低地遺物出土状態

2) 各遺構の概要

A 溝状遺構

D-1 南東側低地と北側低地とを接続するように、ほぼ南北に検出された。幅約1.2～1.6m、深さ約0.35～0.4mで、断面はかまぼこ形である。また、約29mの長さが確認できた。

内部の堆積土は、暗褐色粘質砂であり、場所によっては褐色に近く、有機物の混入は少ない。

溝内からは、平安後期と考えると良いであろう陶器、土師器および奈良時代の須恵器、土師器が出土している。

B 土坑状遺構

K-1 GN4地点の南東側低地への移行部分から検出された。

発見面は、標高約1.5mである。径約1.2mの不整円形で、深さは約0.5mである。

上面では、暗褐色砂が堆積し、比較的見分け安い状態であったが、下部や壁際では、灰色砂が堆積しており、基層の砂層と区別しづらい状態であった。

内部からは、3個体の須恵器が出土した。これらの出土状況は図に示したが、○、△、×印は、それぞれ各個体を区別したものである。これを見ると、須恵器は、当初から破片で土坑内に投入された可能性が高い。

出土した須恵器は、奈良時代に属するものである。

K-2、K-3 周溝墓の埋葬施設の可能性があるため、その項で記す。

C 小穴群

P-1 GN4地点の北西側から検出された。発見面は、標高約1.4～1.5mである。

小穴は、合計12個検出され、穴の径は、15～45cm、深さは、10～20cmである。これらは、雑然とした配置であり、建物を復元するには至らないが、D-1の西側から発見されないことは、極めて示唆的である。

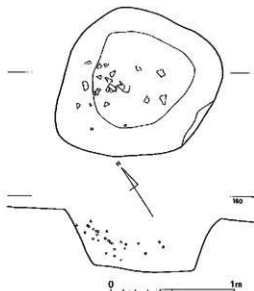
時期の判断できる出土遺物は検出できなかったため、小穴群の時期は不明であるが、D-1と関連する可能性は高い。

P-2 GN4地点の北東側から3個発見されたが、時期その他は不明である。

P-3 GN4地点の南東側から10個検出された。発見面は、標高約1.5mである。

穴の径は、20～35cm、深さは、15～20cmである。

状況は、P-1と似ており、性格、時期は不明である。



第20図 GN4地点K-1実測図

D 周 溝 墓

D-2～5で一つの周溝墓を構成し、K-2・3は、その埋葬施設であろう。

D-2 幅約0.8m、深さ約0.2m、長さ約7.6mである。

発見面は、標高約1.55mであり、砂層直上の茶褐色粘質砂内であり、砂層までは約10cmである。内部の堆積土は、暗褐色粘質砂である。

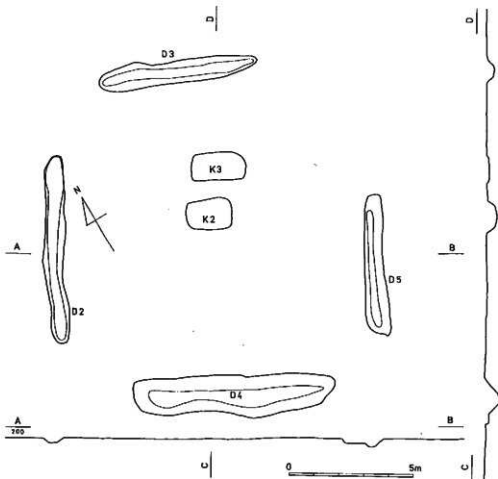
出土遺物は、皆無である。

D-3 幅約1.1～0.9m、深さ約0.3m、長さ約6.4mである。

発見面、内部堆積の状況、出土遺物はD-2と同様である。

D-4 幅約1.6m、深さ約0.6m、長さ約8.1mで、周溝墓を構成するなかでは一番大きい。

発見面、内部堆積の状況、出土遺物はD-2と同様である。



第21図 GN4地点周溝墓実測図

D-5 幅約0.9m、深さ約0.3m、長さ約5.7mである。

発見面、内部堆積の状況、出土遺物はD-2と同様である。

《周溝墓の形態》 以上の溝で周溝墓の外周を構成している。

これにしたがうと、周溝墓の方台部は、一辺約12mとなる。また、四隅にいわゆる陸橋部が見られる形態であるが、これは、南東側が約2.5m、北西側、南西側は約3.2m、北東側は約7mとなり、北東側が極端に広い。

盛土は全く確認できなかった。

《埋葬施設》 埋葬施設は、方台部の中央から北側にかけて2基確認された。

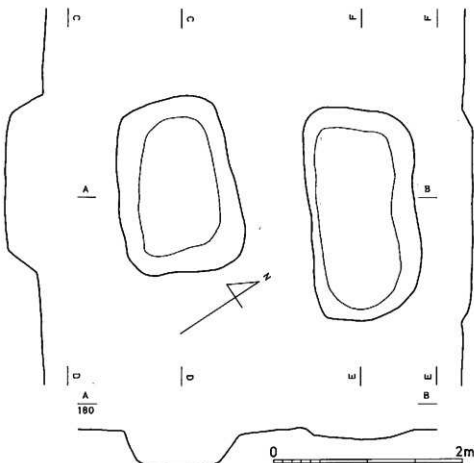
K-2 長径約183cm、短径約125cm、深さ約40cmである。

平面形は、隅丸長方形で、東側の方が若干幅が広い。また、床面の傾斜は見られない。

内部の堆積土は、周溝と類似しているが、周溝よりも砂質が強い。

出土遺物は皆無である。

K-3 K-2に接して北側にある。長径約225cm、短径約112cm、深さ約12cmであり、K



第22図 GN4地点K-2・3実測図

ー2に比較すると若干大型であるが床面は浅い。

平面形は隅丸長方形であり、床面の傾斜は見られない。内部の堆積土は、K-2と同様であり、出土遺物は皆無である。

《年代観》 当周溝墓は、周溝、埋葬施設を含めて出土遺物は皆無であった。強いてあげるとすれば、周溝墓検出以前の包含層から平安時代以降の陶器、土師器が採集されただけである。

このため、遺物から周溝墓構築時期を推定することは不可能である。しかし、調査にあたっては、中世の周溝墓であることも十分考慮に入れて、神経質に進めたにも係わらず、遺物が皆無であったことは、窪地があれば、大なり小なり中世の遺物を包含する当地点の特徴から見て、少なくとも中世には完全に埋積していたとすることができる。

したがって、当周溝墓を中世以降の墳墓と考える必要はない。

この前提に立つと、仮にこの種の形態の周溝墓が台地上や丘陵から発見されれば、ほとんど疑うことなく弥生時代中期から後期初頭頃と考えるように、当周溝墓も同様な年代観を与えても良いであろう。

E 蔵 骨 器

D-1の南端付近の西壁に接して奈良時代の土師器の細片が散布している場所があった。これは、概ね1m四方に飛散した状態で発見され徐々に一箇所に集中していったが、結局全てが元の位置を移動していたとしか考えられない結果となった。また、この土師器と同一個体と考えられる破片は、D-1内からも検出され、これと混在してこの部分に限って奈良時代の蓋坏も検出された。

これら一連の状況は、特に遺構であることを立証するものではないが、宮西遺跡、権現山GN1地点の調査などで、人骨を伴っており、奈良時代の蔵骨器であることが確認された全てが平安から鎌倉時代に一旦地表に露頭し、あるいは削平されていた事実があり、当例も、人骨は採集されなかったが、蔵骨器の可能性が極めて高かったと理解して良いように思う。

F 貝 塚

GN3地点の南端からマシジミを主とした地点貝塚が検出された。これは、径50cmにも満たない小規模なものであるが、13世紀代のものと考えられる。

G そ の 他

GN3地点の低地の遺物散布地は、一種のごみ捨て場と考えることも可能であるが、その西端近くに、土師器の小皿4個体を重ねて置かれた状況が観察できる所があった(第19図△印)。

これがどのような性格をもつものであるかは不明であるが、人為的であることは観取できる。

3) 各遺構のまとめ

GN2・3地点の遺構は、以上のようなものである。これらは大きく弥生時代の遺構、奈良時代の遺構、平安末から鎌倉時代の遺構とに分けて考えることができる。

弥生時代の遺構は周溝墓であり、奈良時代の遺構は土坑状遺構、蔵骨器?である。また、平安

末から鎌倉時代の遺構は、溝状遺構、小穴群、貝塚などである。

周溝墓は、標高 1.55m の砂堤上に発見面があるということ自体に相当高い意義を考えることができる。

平安から鎌倉時代の遺構は、GN 2 地点と同様具体的には十分な解釈を加えることができないが、やはり、中世の園宅地と理解したい。特に、D-1 は、低地間を結ぶ形態をとっており、この溝から西側には、何らの遺構も検出できないという点を加えて考えると、園宅地を区切る溝として位置付けることができよう。また、GN 3 地点の低地は、時期が若干ずれるという難点はあるが、そうした園宅地周辺のごみ捨て場と理解できる。

4 M Y 地 点

1. 地点の概要

当地点は、遺跡地名表では宮ノ腰遺跡と呼んでおり、権現山遺跡と呼んでいるGN1～5地点とは、砂堤列間低地を隔てた北側に位置している。第1図に見られるように、地蔵山古墳の立地する第IV砂堤と近接し、その一部とも考えられるが、基本的には、第IV砂堤とはつながっていないで、その前面に細く長く続いている。したがって、これは、第V砂堤と考えている。

現状では、当調査地点が最西端であるが、現在の昭和製作所内にも工場建設以前には、同一砂堤の延長と思われる島畑があり、これが確認できる西端である。

調査地点での最高所は、標高約2.2mで、砂堤としては低い方である。

基層の砂層は、標高約1.5m付近にあり、低地に向かって傾斜している。

調査は、砂堤の南部分に対して行っており、鎌倉時代の砂堤列間低地がかなりまで埋積していたことを知ることができた。

検出した遺構には、井戸状遺構、土坑状遺構、小穴群、貝塚などがある。また、採集した遺物は、大半が平安後期から鎌倉時代の陶器・土師器であるが、縄文時代の石鏃、古墳から奈良時代の須恵器もある。

1) 基本的層位

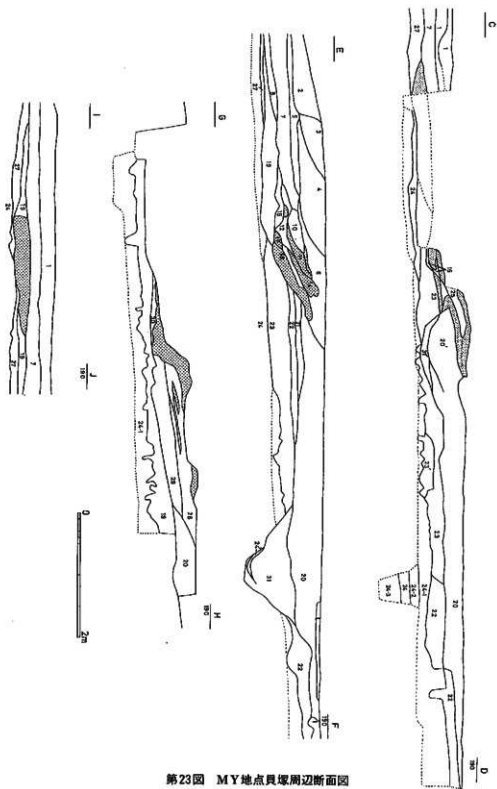
第23図は、井戸状遺構群、貝塚付近の断面図である。層の番号は、EFセクションを基準にして、類似しているものは同一番号を付け、他のセクションにしか見られないものは、番号を追加した。また、'印は、原則的には同一層であるが、分層できるものに対して付けた。

EFセクションの場合7層から22層までは、全て鎌倉時代の遺物を包含しているばかりか、時間的経過もほとんど見られない。7・8・12・13・16・17・19・22層は、暗灰褐色から黒褐色の砂質粘土あるいは粘土層であり、有機物の混入が見られる。また、他の層は、褐色の粘質砂から砂層であり、粘土質の強い層は黒味が強い傾向を良く表現している。

23層は、古墳から平安時代後期までの遺物を包含しているが、GHセクションでは見られなくなるように、部分的に堆積した層である。この層が見られるのは、井戸群付近とP-1付近に限定され、この層を除去すると浅い谷地形が得られることから、浅谷内の埋積物と考えられる。したがって、一般的には他の地点と同様遺物を包含する最下層は、低地では19層、砂堤上では20層である。

20層と19層は、EFセクションでは確認できなかったが、GHセクションでは19層の方が古い時期の堆積であるように見える。しかし、EDセクションでの19層は、多量の遺物を包含しているが、GHセクションの19層は無遺物であり、良く似た別の層の可能性もある。

貝の投棄により、砂堤から低地へ移行する状況は明瞭につかめるが、これらが全て鎌倉時代に形成されている点は興味深い。



第23图 MY地点貝塚周辺断面図

20層の肩の部分に堆積している20'・28・29層は、砂堤の高い部分から低い部分に急速に流れ込んで堆積した層であり、この層も鎌倉時代に形成された層である。

27層は、無遺物層であり、層の特徴は、GN2地点で縄文時代後期と考えられた層に類似している。

第23図 土 層 説 明

EFセクション

1. 灰褐色砂泥(攪乱) 2. 灰褐色砂(管状の鉄分が多い) 3. 茶褐色砂 4. 褐色砂質粘土
5. 茶褐色砂質粘土(銹鉄の層、水田床土) 6. 褐色砂質粘土(4層と類似しているが、砂質が強い)
7. 暗灰色砂質粘土(鎌倉の遺物を多く含む) 8. 暗灰色粘土と黒褐色有機粘土の混合(7・19層の混合)
9. 灰褐色砂+貝 10. 灰褐色砂(やや粘質) 11. 灰褐色砂+少量の貝 12. 暗褐色砂質粘土
13. 暗褐色砂質粘土+貝 14. 灰褐色砂+貝 15. 黄灰色砂(24層と類似)
16. 暗褐色粘土+砂+有機物 17. 暗褐色砂質粘土+貝 18. 灰褐色砂+貝 19. 黒褐色有機粘土(上半を中心に鎌倉の遺物を多く含む)
20. 褐色粘質砂 21. 赤褐色粘質砂(鎌倉の遺物を少量含む) 22. 暗灰褐色粘質砂(鎌倉の遺物を少量含む) 23. 黒褐色粘質砂(古墳から平安の遺物を少量含む)
24. 黄褐色中粒砂 24' 黄灰色砂(15層と同様24層の再堆積であろう)
31. 暗灰褐色粘質砂(遺構内堆積)

CDセクション

- 1' あげ土 1. 水田耕作土 7. 暗灰色粘土 15. 黄灰色中粒砂 20. 褐色粘質砂
- 20' 褐色粘質砂の中に灰色砂が数層の薄層になっている(薄層は北から南に流れている。漸移的に20層になる)
22. 暗褐色粘質砂 23. 黒褐色粘質砂 23' 23と同一層(粘質が強い)
24. 黄褐色中粒砂 24-1. 褐色細砂(古墳時代の遺物を含む?) 24-2. 褐色中粒砂
24. 黄褐色中粒砂 24-3. 褐色中粒砂 25. 褐色粘土 27. 黒褐色有機粘質砂(19層と同層の可能性が高い)
- 31' 灰茶褐色砂質粘土(茶褐色の有機物が多い)

GIIセクション

19. 黒褐色砂質粘土(この部分以西では、殆んど遺物を含まない) 20. 褐色粘質砂 24-1. 褐色砂(有機物を少量含む)
28. 暗褐色細砂と褐色細砂が互層になる 29. 褐色細砂と黒褐色粘質砂が細かな互層になる(28. 29共に、北から南への堆積)
30. 灰黒褐色粘土

IJセクション

1. 水田耕作土 7. 暗灰色粘土 19. 黒褐色有機粘土(この付近以南では遺物は殆んど含まない)
24. 黄褐色中粒砂 27. 黒褐色有機砂質粘土(19層と似ているが、分層はできる)

2) 各遺構の概要

A 溝状遺構

D-1 貝層東端直下から開始し、低地へと移行する部分を巡るように調査区外に延びている。総延長は、約40mであり、幅は、1m前後である。深さは0.1～0.3mであり、東から西に向かって徐々に底面が低下する。

内部の堆積土は、有機質の粘質砂であり、流れ込み堆積の顕著な部分もある。

CDセクションでは、明らかに貝層形成の途中で掘削され、急速に埋積したことが読み取れる。

溝の位置関係からは、D-7と対応し、性格も類似しているように思われる。

出土遺物は少量であるが、奈良時代から鎌倉時代の須恵器・陶器がある。

溝の時期は、貝層との関係を重視し、鎌倉時代後期と考える。

D-2 S4W11付近からS1W5付近に検出された。長さ約16m、幅約0.5m、深さ約0.3mで、ほぼ直線的なU字溝である。

D-11とは接続しているが新古関係は不明である。I-8・9は、この溝に切られている。

内部の堆積土は、暗褐色砂質粘土である。

出土遺物は少量であるが、鎌倉時代後期の陶器が主であり、古墳時代の須恵器が少量含まれている。また、鎌倉後期の常滑焼片も出土している。

鎌倉後期の溝であろう。

D-3 D-4・5とはほぼ平行している。長さ約7.3m、幅約0.4m、深さ0.1m前後の浅い溝である。

内部の堆積土は灰色粘土である。また、出土遺物はほとんどが細片で時期の判別できるものは少ない。しかし、近世の遺物は含まれていない。

D-4 D-3の西側0.3～0.6mのところに、D-3に平行して検出された。

状況はD-3に極めて類似している。

D-5 D-4の西側約1.1mのところにある。

状況は、D-3・4と類似しているが、D-6・7と接続している。しかし、両者との関係は不明である。

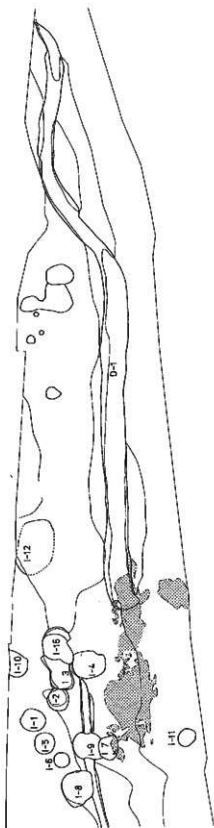
D-6 長さ約17m、幅約0.5m、深さ約0.1mのU字溝である。

D-9とはほぼ平行し、D-8を切っている。また、D-5に接しているが、関係は不明である。

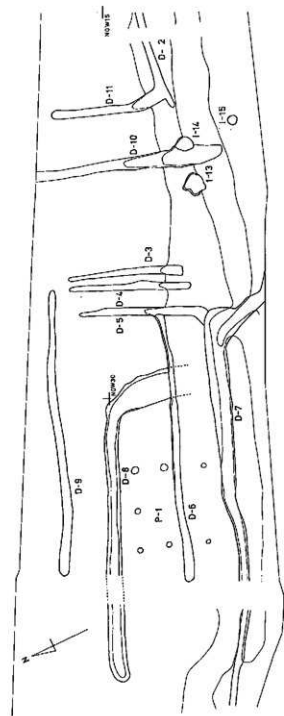
内部の堆積土は、堅く締まった灰褐色粘土である。

出土遺物は、少量の須恵器・陶器・土師器であるが、堆積土は近世の層のように思われる。

D-7 S10W31付近から西に検出された。第24図に示したよりも更に西に延び、低地への移行部を巡るようになって調査区外に続いている。総延長は約40mであり、幅は、0.4～1.3mであるが、これは発見面の違いによるもので、本来は幅1m前後の溝であろう。深さは、深い部分で約0.6mである。断面はU字状である。



0 10m



第24図 MY地点全体図

内部の堆積土は、上層は灰褐色砂質粘土、下層は、暗灰色粘質砂である。

P-1付近では、明らかに平安後期の層を切っている。

内部からは、弥生～鎌倉時代の遺物が少量出土している。

溝の時期は、鎌倉後期であろう。

D-8 P-1を囲むようにL字状に検出された。NOW48付近からNOW31付近まではほぼ一直線に延びてから約90°屈曲しD-6と交差する付近まで検出されたが、この付近から南は、ベースが内部堆積土と同様の暗褐色粘質砂となり、検出できなくなる。

東西の溝は、長さ約17m、幅約0.8m、深さ約0.25mであり、南北には長さ約4mまで確認できた。南北の部分は、幅約2m、深さ約0.35mとなり、大型である。また、この部分に須恵器甕の破片が多数集中していた。

出土遺物は、平安後期の陶器より新しいものはない。また、甕は、奈良時代より古いものであり、溝の周辺からも同一個体が出土しており、溝掘削時に混入したものであろう。

溝の時期は、平安後期であろう。

D-9 D-4の北側からほぼ90°の角度をもって西に延びている。長さ約19m、幅約0.6m、深さ約0.15mである。

内部の堆積土は、堅く締まった灰褐色粘土であり、D-6と類似している。

出土遺物は皆無である。

D-10 D-11の西側約3mにあり、ほぼ平行している。

標高約1.7m付近で発見した段階では、長さ約4mの溝と約3.5mの溝の二つに分かれてた浅いものであったが、周辺を約0.1m掘下げた結果、両者は同一の溝となり、堆積土も暗褐色粘質砂となった。

長さ約12mであるが北側は調査区外に延びている。幅は0.6～1.2mであり、深さは約0.3mである。底面は、南に向かって低下し南端では標高約1mとなる。

I-14と重複しているが、新古関係は不明である。

出土遺物は少量の陶器・土師器であるが、時期は不明である。

D-11 長さ約7.5m、幅約0.5m、深さ約0.1mの浅い溝である。

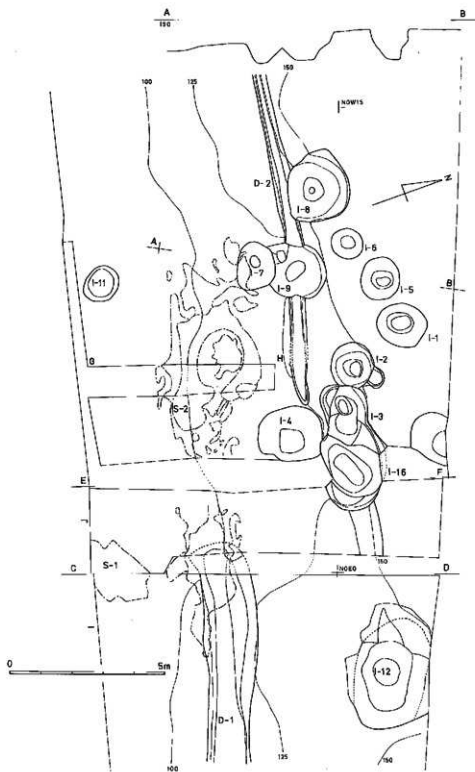
D-2と接しているが関係は不明である。

内部の堆積土は暗褐色砂質粘土であり、少量の陶器・土師器を含んでいるが、時期の確認できるものはない。

B 井戸状遺構

第25図に見られるように、貝塚の周辺に井戸群を形成している。一応、I-1～I-16を一括して一つの井戸群と考えるが、I-11のように土坑の可能性の強いものや、I-16のように二つ以上になる可能性の強いものもある。

また、切合いも見られるが、新古の確認できた例は少ない。



第25图 MY地点具塚・井戸群実測図

出土遺物は、いずれも少量の陶器・土師器であり、その下限は全て鎌倉後期である。したがって、以後の記述では記さない。

I-1 径約1.5m、深さ約0.9mの円形プランを呈し、発見面から約0.6m掘下げたところで、壁面の傾斜が急になり、二段式の形態をとっている。底面は、約0.5×0.6mの楕円形である。

内部の堆積土は暗褐色粘質砂から暗褐色砂と変化するが、有機物の混じりが少ない。とくに、二段式の下段の堆積物は、周りの砂層より若干黒い程度である。

発見面は標高約1.63m、底面は標高約0.75mであり、井戸群の中で最も高い位置から検出された。また、この発見面は、第23図の20層最上面である。

I-2 径約1.45m、深さ約0.9mの円形プランを呈しているが、北東側に約0.5×0.5m、深さ約0.25mの階段状落込みが付随している。

二段式の形態をとり、底面は約0.35×0.5mの不整楕円形である。

内部の堆積土は、暗褐色粘質砂であるが、下部では粘土質が強い。

I-3と切合っているが、I-3よりは新しい。

発見面は標高約1.57m、底面は標高約0.65mである。

I-3 I-2・16と切合っていると共に、極めて不整形であり、形態が良く解らない。原則的には、径約1.5mの円形プランを呈した二段式になるものと考えられる。底面は、約0.3×0.5mの楕円形である。

発見面は、標高約1.5m、底面は標高約0.85mである。

内部の堆積土は、暗褐色砂質粘土であり、若干の有機物を含んでいる。

東側に隣接した井戸状遺構を全てI-16とする前提で、I-16より新しく、I-2より古い。

I-4 長径約2.2m、短径約1.7mの若干不整形の隅丸長方形のプランを呈している。

二段式の形態にはならないで、ほぼ同じ傾斜で底面に達している。底面は、一辺約0.8mの隅丸方形である。

内部の堆積は、暗褐色シルト質砂であり、凹地堆積状の灰色粘土の薄層が数層見られる。

I-16とわずかに切合っており、I-16より古い。

発見面は、標高約1.25m、底面は、標高約5.5mである。

I-5 径約1.35mの円形プランを呈した二段式で、底面は約0.5×0.3mである。

内部の堆積は、I-1と類似しており、有機物は含まれない。

発見面は、標高約1.55m、底面は、標高約0.6mである。

I-6 径約1mの円形プランを呈している。二段式の形態はとらないで、底面まではほぼ同じ傾斜である。

内部の堆積は、発見面付近では淡暗褐色砂質粘土であり、下部は、淡暗褐色粘質砂である。いずれも、壁を構成する層と類似している。

発見面は、標高約1.6m、底面は、標高約1.05mであり、底面が他の例に比較して極端に高く、

井戸の機能を果たし得るか疑問である。

I-7 長径約1.6m、短径約1.2mの不整楕円形を呈し、二段式ではない。底面は、径約0.3mの円形である。

内部の堆積は、シルト質黒褐色砂であるが、上層には貝の堆積もある。また、凹地堆積を示す灰色粘土の薄層が顕著に見られる。

I-9、貝層と重複しているが、貝層上に掘込み面があるのは明らかであり、少なくとも井戸付近の貝層よりは先行している。また、灰色粘土の堆積状況からI-9より古いことも確実である。

発見面は、標高約1.2m、底面は、標高約0.5mである。

I-8 径約2.2mの円形を呈し、典型的な二段式である。二段目上端の径は約0.8mであり、底面は、径約0.2mである。

内部の堆積は、暗褐色砂が主体であり、壁面には厚さ0.5cm程度の黄褐色砂(鉄分の層)があり、明瞭に壁を区別することができる。

発見面は、標高約1.55m、底面は、標高約0.35mであり、井戸群の中で最も深い。

D-2と切合っているが、D-2より古い。

I-9 長径約2.6m、短径約2mの楕円形を呈し、南西側にステップ状の小さなテラスがある。

内部の堆積は、暗褐色シルト質砂であり、灰色粘土の薄層が見られる。

D-2、I-7と切合っているが、いずれよりも古い。

発見面は、標高約1.5m、底面は、標高約0.55mである。

I-10 約半分が、調査区の外側である。径約1.5m程度の円形プランであろう。

内部堆積は、上層では淡暗褐色砂質粘土であり、下層はシルト質の強い黒褐色砂である。

発見面は、標高約1.65m、底面は、標高約0.75mである。

この井戸は、第23図C-Dセクションの22層を切って掘られていることが明瞭に観察できる。

I-11 貝層南側の遺物包含層を掘下げる過程で、包含層の最下部で検出したが、さらに上部から掘り込まれている可能性は高い。しかし、内部の出土遺物は、鎌倉後期のものである。

径約1.2mのほぼ円形プランを呈し、深さは約0.2mと浅く、発見位置も低地であり、井戸と言えない可能性の方が高い。

発見面は、標高約0.9mであり、底面は、標高約0.7mである。

内部の堆積は、黒褐色有機粘質砂であり、I9層と類似している。

I-12 発見状況が悪く掘り過ぎなどでプランが良くわからない。長径約3.7m、短径約2.3mの楕円形プランを呈し、井戸群の中では最も大型である。中央部に径約0.9mの円形の掘り込みが見られ、深さは約0.3mである。

発見面は、標高約1.65m、底面は標高約0.5mである。

内部の堆積は、上層が暗褐色粘質砂で22層に類似している。下層は、暗褐色砂、最下層は灰色砂であり、基層と変化しないが、鉄分を多量に含む砂層が壁の周囲に堆積していたことから壁面の検出ができた。

22層を切っていることもあって、奈良時代の須恵器片を多く含んでいる。

I-16 確認調査のトレンチで検出したものであるが、当初は溝状遺構と考えていた。また、I-3と重複しているがこれよりも古く、調査は最後になった。

長径約2.6m、短径約2.0mの楕円形プランを呈し、東側にステップ状の浅い落込みが見られる。

第23図E-Fセクションで観察できるように、中段がある二段式である。底面も長径約1.2m、短径約0.5mの楕円形を呈し、中段に土留めと思われる杭が2本検出された。

内部の堆積は、第23図のようで、上層は、褐色粘質砂であるが、この段階では、プランを十分つかむことはできない。下層は、暗灰褐色粘質砂でシルト質が強い。また、下部に砂層の崩れと思われる黄灰色砂の薄層がある。

掘り込み開始面は、標高約1.6mであり、底面は、標高約0.55mである。

I-13 径約1.5mの不整形円形を呈し、南側にステップ状の小さな落込みがある。

発見面は、標高約1.2mであり、低地の基層直上である。

内部の堆積は、褐色砂であり基層と類似しているが、灰色粘土の薄層によって壁面を検出した。底面は、標高約0.55mである。

I-14 D-10と切りあっているが新古の関係は不明である。

径約1.1mの円形プランを呈しているが、底面はやや隅丸方形になる。

発見面は、標高約1.2mであり、底面は標高約0.55mである。

内部の堆積は、暗褐色粘質砂であり、壁に添って鉄分の多い砂が見られる。

I-15 径約0.6mの円形を呈している。

内部の堆積は、井戸内に砂が噴出した一種の噴砂現象とも思えるが、下層の灰色砂である。

発見面は、標高約0.85mであり、底面は、標高約0.45mである。

C 貝 塚

第23図で顕著に観察できるように、砂堤から低地へ移行する部分は、段丘状の段を造ってから傾斜の緩い低地となっているが、この低地への移行部分および低地から貝層が検出された。

層位を見ると、幾層にも分層できるが、それぞれの横へのつながりはあまり観察できない。これは、1㎡前後の地点貝塚が集合したためであろう。

ここでは低地の貝層をS-1とし、低地への移行部の貝層をS-2とした。

S-1 南北約2.5m、東西約2.0m、厚さ約0.2mでマシジミを主体とした貝層であるが、少量のキサザ、コタマ貝、カキ、ヤマトシジミなどが含まれている。また、獣骨も少量検出された。貝類は、完全に石灰化しないで、茶褐色、黒褐色をしたものも多く含まれている。これらは特に

貝層上面や周囲で顕著に観察できる。

貝層は、C-D、I-J セクションで観察できるように、27層（無遺物層）の凹地に投棄されたもののようである。

貝層内からは、陶器などの遺物はほとんど出土しないが、直上で一部が貝層の中に潜るようにして鎌倉後期の常滑焼が検出された。

S-2 砂堤平坦面の末端から低地にかけて見られる貝層である。

東西約12m、南北約3.5mの範囲に貝の分布が見られるが、周辺は小規模に点在する貝層となっている。

第23図で観察できるように、間層や貝層の状況から数層にわけられるばかりか、D-1との重複が見られたり、貝層自体は変化が激しい。

貝の種類は、S-1と同様であるが、E-F セクションの13層（16層の上にある小規模な貝層）は、カキの単純層である。

良好な横断が作成できなかったという調査ミスをおかしたが、縦断面で見える限り、上層と下層とではかなりの時期差を認めたいほど良好な堆積である。

出土遺物は、貝層からは細片の陶器・土師器などが若干得られただけである。しかし、周辺や貝層下からは多量に陶器・土師器が出土している。

これを見ると、明らかに貝層より古い層である19・20・21層の遺物も、貝層内の遺物も、あるいは明らかに貝層より新しい7層の遺物も、全て鎌倉後期のものであり、急速に形成されたことが伺える。

D 小 穴 群

P-1 D-8に囲まれるように7個の小穴が検出された。これらは、その配置から1棟の掘立て柱の建物と考えることができる。

この付近はD-8付近を北端とし、D-7付近では約0.2m低くなる浅谷に当たり、小穴発見面以下でも平安時代後期の包含層となっている。この層は暗褐色砂質粘土であり、小穴内の堆積物と類似している。南側中央に小穴が発見できなかったのは、このためであろう。

小穴は径0.25～0.45mで、深さは、0.2～0.4mである。

柱間は、東西が約1.8m、南北は、北側が約1.8m南側が約2.55mである。

柱穴内からは、少量の陶器・土師器が出土したが、鎌倉時代の下るものは含まれていない。しかし、平安後期の層を切っており、建物の時期は平安後期から鎌倉前期と考えられる。

この所見に基づけば、D-8と関連性があることも可能である。

E そ の 他

発掘区全体に古墳から奈良時代の須恵器・土師器が少量出土しているが、これらは必ずしも細片ではなく、完形品に近いことも少なくなかった。しかし、遺構は全く検出されない。なんらかの遺構に伴った可能性は極めて高いが、流亡したと考えている。

3) 各遺構のまとめ

以上の遺構を概観すると、P-1やD-8のように平安時代と考えることのできる遺構も若干見られるが、大半は鎌倉後期の遺構である。また、溝状遺構の中には、時期を決めかねるものも多い。

井戸群については、先に一部指摘したように2群に大別される。一つは、I-1~12・16であり、他の一つは、I-13~15である。

前者は、確認できる範囲では順次掘られている。たとえば、I-16→I-3→I-2の順であり、I-7→I-9の順である。これらを参考にすると、同時に機能していたのは群のなかの数基であったといえよう。また、貝層と井戸の形成の時期は全く同時であり、有機的関連があると思わなくてはならないであろう。

井戸の形態は、大別すれば2種類である。一つは、I-8などのように二段式の形態をとるものであり、他の一つは、段を持たないものである。前者は、GN地点の例を見ると井戸枠が埋設されていた可能性の高いものである。後者に関しては、井戸枠の存在が予測できないものであるが、存在を否定するものではない。

井戸の底面は、標高0.35~1.05mと高低が激しい。しかし、概ねは0.5m前後から0.8m以下であり、平安時代後期であることの確実なGN2-I-1やGN1-I-1のように標高0.2m程度のものは見られない。

MY地点の調査は、圃場整備事業の排水路が完成してから行ったため、湧水の被害は比較的に少なかったが、排水が完備した後の乾燥期の湧水点は、標高約0.35mであった。このことは、底面が極端に高い例や低地内から検出した例などを除外すれば、すべて井戸としての機能を果たし得たと考えることを可能とするであろう。しかし、この観点にたてば、S-1など貝層の低い部分は水面下となりかねない。

貝塚は、中世のものとしては大型に属するであろう。当初は、厚い貝層を幾つかに分層できたことか、中世陶器の消費地での編年を期待したが、この点は、貝層の形成が意外に短期間であったという結論を得るにとどまった。しかし、この貝層の調査によって、貝の投棄が限定された範囲であるという所見とは別に、陶器・土師器などの生活用具も限定された範囲にしか投棄していないことが明瞭になった。例えば、低地に堆積した7層や19層の上面は、貝塚の周辺では多量の遺物を含んでいるのに対し、そこから離れると無遺物層に近い状況になっている。

このような井戸群、貝塚の状況は、同時期の建物跡を発見できなかったが、鎌倉時代の園宅地が遠からぬ場所にあることを予測させる。

井戸群などより若干古い建物跡は、貝塚などが形成される前段階のものであろう。

V 出土遺物の概要

1 縄文時代の遺物

縄文時代の遺物は、周辺の環境の項で記したように、砂堤列上の遺跡から少量ではあるが普遍的に採集されている。

当遺跡からは、石鏃3点と剥片1点が採集されている。

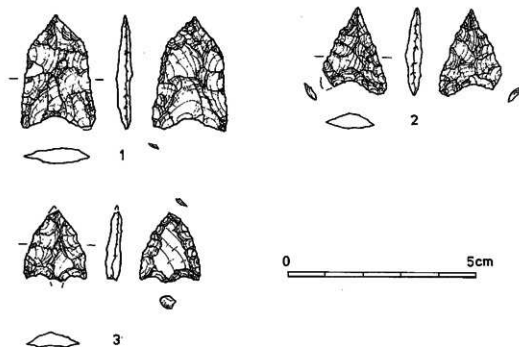
第26図1・2はGN3地点の南東側低地の鎌倉時代の包含層から発見されたものである。1・2共にいわゆる凹基無茎式であり、材質は頁岩である。

3は、MY地点の褐色砂質粘土から鎌倉時代の遺物と一緒に採集されたものである。茅部と先端部を欠損しているが、いわゆる凹基有茎式であり、材質はチャートである。

また、GN3地点からは、剥片1点も採集されている。

これらは、いずれも鎌倉時代の包含層から出土したものであるが、磨耗した痕跡はなく、遠からぬ場所からの移動と考えられる。

浅羽町の海岸平野では第I砂堤までは縄文時代の遺物が採集されていたが、今回の資料は、第V・VI砂堤からの発見例であり、縄文時代人の生活領域がさらに南に広がって確認されたことになる。



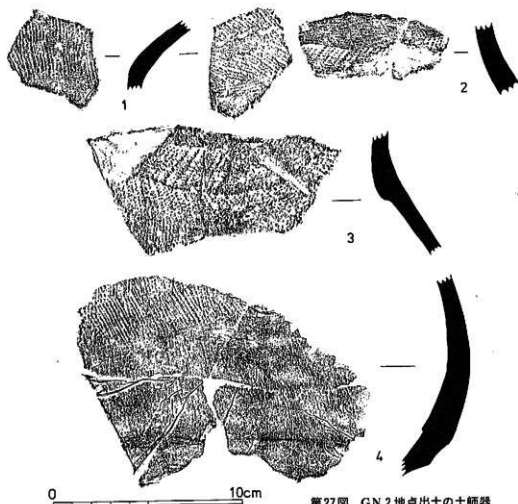
第26図 各地点出土の石鏃

2 弥生時代から古墳時代前期の遺物

第27図は、GN 2 地点の北側低地の鎌倉時代の遺物包含層から発見したもので、破片総数では、約50片である。

1 は、頸部から口縁部にかけての破片である。外面は口縁部は縦ハケ、頸部はナデであり、内面は、右下がりの縄文がみられ、1 条の結節がある。2・3 は、頸部から肩部の破片である。2 は、左下がりの櫛目押圧文が1 段見られ、2 は、左下がりと右下がりとして羽状になる櫛目押圧文が見られる。3 の内面には、接合の段が大きく膨らみ、指圧痕が顕著に見られる。4 は、胴部の破片である。最大径近くまでは右下がりの斜めハケ、それ以下は随磨きである。また、胴部下部には稜が見られ、その上下が僅かに窪んでいる。内面は、斜板ナデであるが、稜より下はナデである。いずれも極めて類似した破片であり、同一個体の可能性が濃厚である。

弥生時代とも古墳時代ともいえる土器であるが、古墳時代前期の土師器と考えている。



第27図 GN 2 地点出土の土師器

3 古墳時代後期から奈良時代の遺物

1) 埴輪

GN1地点を除いて、埴輪あるいは埴輪らしい破片が少量ずつ出土している。近くには、径約40mで埴輪列をもつ地蔵山1号墳があり、この古墳との関連で理解されるが、必ずしも地蔵山1号墳に伴ったものとはいえない。

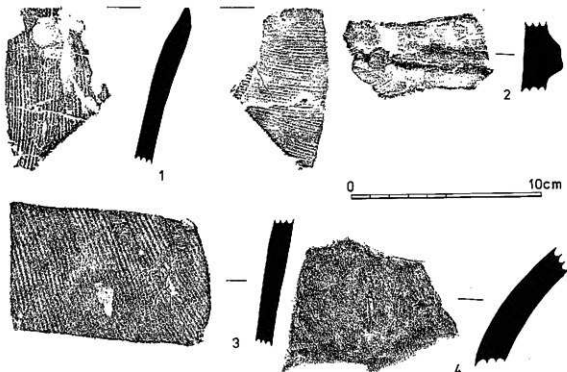
第28図は、それらの埴輪の中で特徴を指摘できるものの拓本である。1は口縁部、2はタガの部分、3は体部、4は朝顔形の埴輪片であろう。出土地点は、1がMY地点西端の平安時代以前の包含層、2がGN2地点の鎌倉時代の包含層、3がGN1とGN2地点の中間の水田内からの採集、4はGN3地点の表土層である。

これらの他、表面が磨耗して調整痕などの観察ができない破片などが数点出土している。

埴輪としては、緩ハケ調整を主体としたもので、6世紀代の特徴を持っており、先の地蔵山1号墳とはほぼ同一時期のものである。

地蔵山1号墳の測量調査報告書では、これらの埴輪や6～7世紀の須恵器の分布から古墳の可能性を指摘すると共に、群集墳の分布範囲を予測したが、古墳でないまでも埴輪棺などは十分に予測できる。

今後は、地蔵山古墳群のなかで検討したい。



第28図 各地点出土の埴輪

2) 須 恵 器

各地点から少量ずつ出土している。

破片の総数の割に図化できる大型破片や、完形品に近いものが目立つが、遺構に伴う例は少ない。

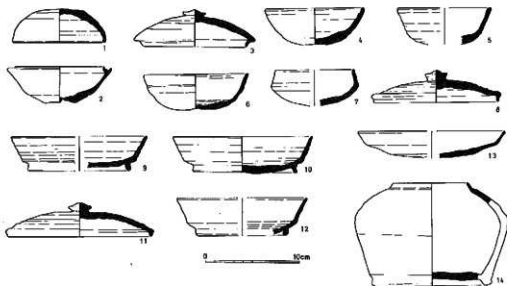
1・2は、MY地点の6区(貝塚の西方約10m)から出土したもので、両者は約80cmの間隔においてほぼ完全な形で検出されたが、伴う遺構は明確でない。遠考研編年の第Ⅳ期前半に属する資料であろう。

3～7は、遠考研編年の第Ⅳ期後半の資料であろう。4～6は、MY地点西端部の暗褐色粘質砂層から、第30図の土師器と共に検出されたものであり、7は、MY地点D-1内、3は、I-12の東側で、第23図23層に属する層からの出土である。

8～14は、遠考研編年第Ⅴ期の資料であろう。

9・10は、GN4地点のK-1内出土であり、8は、同地点のD-1内出土であり、11は、MY地点のP-1付近の暗褐色砂質粘土層の出土である。13・14は、GN1地点の西端部試掘グリットから出土したもので、第15図第6層に包含されていた。この2個体は、2×2mのグリット内に限定されて出土し、他の個体はまったく含まれていない。

古墳時代後期から奈良時代の須恵器は、これらの他、遠考研編年第Ⅲ期中葉に属する細片なども出土している。また、MY地点では、地点の概要で示したように、この時期の包含層が僅かではあるが認められていることから、他の地点に比較すれば多量の資料が検出されており、器種にも高坏、すり鉢、甕等がみられる。



第29図 各地点出土の須恵器

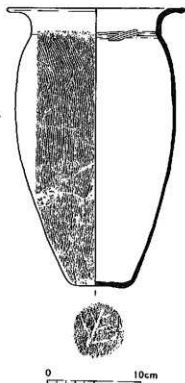
3) 土 師 器

第30図は、MY地点西端部の包含層から一括出土したもので奈良時代に属するであろう。また、GN1地点の蔵骨器も奈良時代の土師器である。

古墳時代後期から奈良時代にかけての土師器は、蔵骨器と思われる数点を除くとほとんど見られない。とくに、古墳時代後期の土師器は、それらしい数点の細片以外には全く見られず、須恵器の検出状況と合わせ考えると、一般的な集落跡を想定できない内容である。

4) 古墳時代後期から奈良時代の遺物出土状況の特徴

(1)~(3)で示したように、古墳時代から奈良時代の遺物は、各地点に点在して検出されているが、遺構に伴うことが明確なのはGN1地点の蔵骨器と、GN4地点の土坑内出土の須恵器だけである。しかし、第29図1・2や13・14の須恵器、あるいは第30図に示した土師器などは、きわめて突発的出土状況を示すものであり、先に各地点の概要や、地理的環境で示したように、何らかの遺構に伴った可能性が極めて高いと見ている。



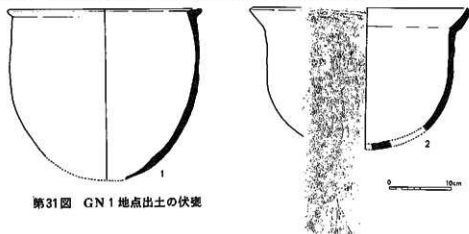
第30図 MY地点出土の土師器

4 平安時代後期から鎌倉時代の遺物

1) 陶 器

平安時代後期の陶器 各地点から少量出土している。

第31図は土師質の陶器であり、いずれも墳墓に使用されていたいわゆる伏甕である。1は、第32図2~4と共にGN1地点のK-2から出土したものである。2は、GN1地点のK-1から出土した。いずれも平安時代後期の製品であろうが、2の方が古い要素が強い。



第31図 GN1地点出土の伏甕

第32図1～7は、平安時代後期の陶器である。灰釉を施したものは図中にはないが、1～5は灰釉陶器の時代に属するものであろう。2～5に比較すれば、1は1型式程度古いであろう。6・7は、いわゆる行基施であり、実年代は12世紀であろう。

1・5・6はMY地点P-1付近で第23図の23層に対応する層から出土したものである。2～4は、GN1地点のK-2内に副葬されていたものである。また、7はGN1地点のI-1から出土した。

鎌倉時代前期の陶器 各地点から出土しているが、GN2・4地点が目立つ。量的には、鎌倉時代後期に比較すれば少量であるが、破片では相当数ある。

第32図8～15はそれらの実測図である。8～10はGN2地点のD-1から、11はGN2地点のD-3から、12はGN1地点I-2内、13・14はGN4地点D-1内、15はMY地点D-8内出土である。

碗は、大型で浅いものが目立ち、中・小型のものは確認できない。体部は丸味をもち、口縁部は外弯し、端部は肥厚する。高台部は、断面三角形の付け高台で初殻痕が見られるが、12は初殻痕がない。また、図示できなかったが、高台部の断面が四角で薄手の製品も見られる。小皿は、口径10cm前後で付け高台である。また、高台には初殻痕は見られない。10の高台部内面には、焼成時に付着した砂がみられ、重ね焼きに砂を用いていることがわかる。

14には若干新しい要素がみられ、10・12には古い要素が強い。特に、後者は実年代が12世紀の可能性が強い。

鎌倉時代後期の陶器 各地点から多量に出土している。

第31図16～34は、MY地点の貝塚およびその周辺から出土したものである。16～21は、第23図の19層出土であり、22～26は、同じく7・8層の出土である。また、27～29は貝層内、30～33は第20層出土である。34は、貝層と切合い関係のあるD-1内の出土である。

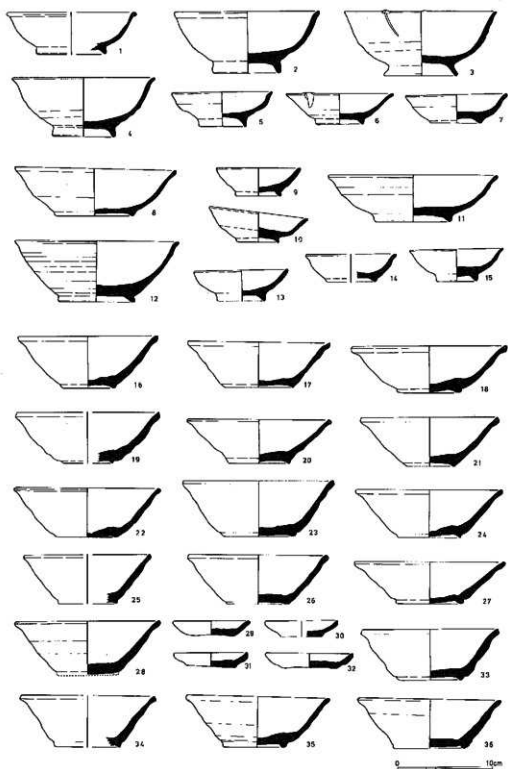
貝塚およびその周辺の出土陶器は、碗に比較して小皿が極端に少なく、一般的でない傾向がある。特に、貝塚の前面からは小皿はほとんど出土していない。

碗は、18のように丸味をもった体部と、外弯気味の口縁部で示されるように、古い要素をもつものも少量みられる。しかし、体部は上外方にのび、口縁部はほぼ直線的か若干下外弯気味で端部は肥厚し、高台部はごくわずかに断面三角の粘土紐が貼り付けられているものが圧倒的に多い。器壁は分厚く、成形は粗雑であり、高台部には例外なく初殻痕がみられる。また、17・20などは他の資料とは異なった生産地から供給された可能性が高い。

小皿は、浅く扁平であり、高台は付かない。30・31などは、高台の名残ともいえる底部があり、古い要素をもつとみることができる。

なお、35はGN1地点のK-5内、36はGN3地点の西側低地から出土したものである。

以上の鎌倉時代後期の陶器としたもののうち、18・35・30・31などは他のものと比較すれば1段階あるいは1型式程度古いと考えることも可能であるが、当遺跡ではそれらを証明する資料が



第32図 各地点出土の陶器(平安後期から鎌倉時代)

得られなかったことと、生産地との関連が充分把握できなかったので、一括して鎌倉後期とした。

2) そ の 他

出土遺物の整理が不十分なため、実測図などを掲載しなかったが次のような遺物が出土している。

陶・土甕 各地点から多数出土しているが、大半は鎌倉時代の包含層から採集した。

青磁器 多量ではないが細片が出土している。

常滑焼 鎌倉時代後期の陶器と供伴して出土している。口縁部の破片も少量見られるが、鎌倉後期と考えて問題はない。

井戸枠 曲物の井戸枠などが出土している。

これらの資料は、水洗い・注記が終了した状態で保管されている。

お わ り

以上をもって権現山遺跡の発掘調査報告を終わる。

今回の調査では、事前の踏査の段階で径約40mの円墳である地蔵山古墳を発見するという大成果を得た。調査では、縄文時代の石器を発見し、弥生時代の周溝墓を調査するなど、砂堤の成立史を考える上で貴重な資料を得ることができた。また、調査の主体を占めた中世の遺構・遺物も多数検出することができた。

一方、調査の当初に主要課題として取り組んだ、歴史時代における海水準の変化と人との係わりについては、かならずしも充分ではないが、ある程度の成果を得ることができた。砂堤上の奈良時代の遺構が、それ以降に削平され、その上に再び堆積を開始したのは平安時代後期であることが半ば確認できたのは、大きな成果としてあげることができる。この点は、歴史時代にも生活の場を変更するような海水準の変化があることを前提にした発掘へと発展するであろう。

当遺跡は中世の農村といえようが、これらは鎌倉時代後期を境として焼絶されている。この現象は、過去に調査した浅羽町内の青木、馬場、西立、宮西などの遺跡でも認めうるものであり、鎌倉時代後期から室町時代にかけて、当地方の農村に大きな変化があったことを予測させる。これは、現在の歴史のなかでは充分に解釈できないものであろうが、少なくとも、現在の集落形態が成立するのはこの時期であったとはいえそうである。

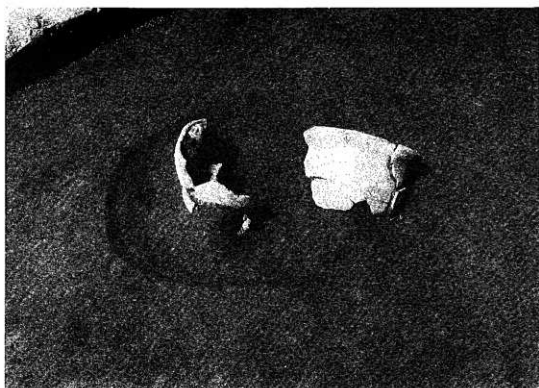
遺跡を客観的に調査することは、考古学の立場ではそれほど大変なことではないが、この成果を歴史学のなかでとらえようとすると、中世の地方史研究の遅れともいえるであろうが、基礎資料が不足して、避難した内容になってしまった。このため、中世の歴史的環境、地理的環境の調査が至急に迫られた課題となった。

結局は、調査期間中この2点に集中することが多くなり、現実に調査した資料の整理が遅れてしまった。もともと弥生とか古墳とかの時代の考古学を進めていた立場からすると、歴史時代の基礎資料作りは困難が多かった。浅羽町の中世といえば浅羽庄司宗信と馬伏塚城しか知らない次元からの出発ではあったが、地域の中世史研究の遅れは強く感じた。こうした中で、「袋井市史」はきわめて有益であった。もし、この資料がなかったら、発掘の成果を生かすことは困難だったとみなくてはならないであろう。今回の報告書は、そうした意味では発掘調査報告書としては不完全なものである。しかし、浅羽平野の中世を掘る資料は整備されつつあり、将来に向けて、考古学的立場から中世を解明する原点はできた気がする。

文末になったが、今回の調査にあたり、静岡大学の加藤芳朗教授、市原壽文教授には、周囲の環境調査を始め様々の御指導をえた。記して感謝の意を表したい。また、そのような御親切にもかかわらず、内容を充分に生かしきれなかったことについては深く謝罪したい。

柴 田 裕

写真図版



G N I 地点 K - 1 調査状況



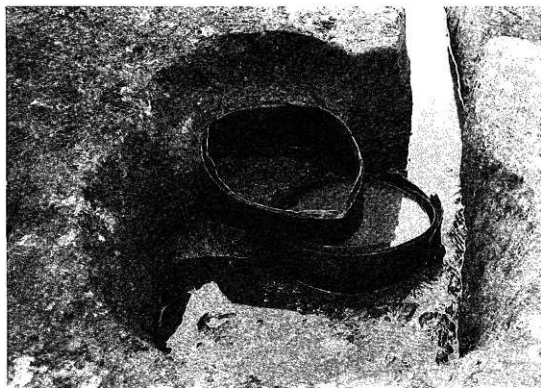
G N I 地点 K - 2 調査状況



GN I 地点 K-2 遺物出土状況



GN I 地点 K-3-5 と I-5



G N I 地点 1 - 3 井戸枠検出状況



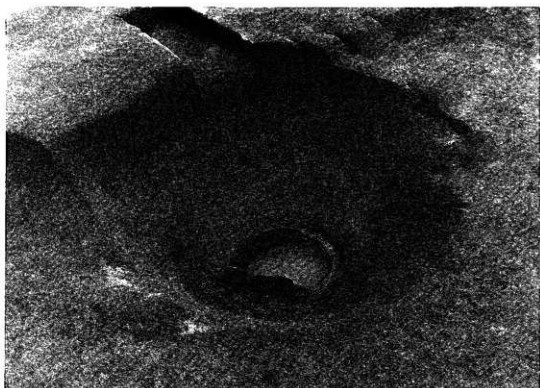
G N I 地点 1 - 4 調査状況



G N 1 地点 1 - 6 調査状況



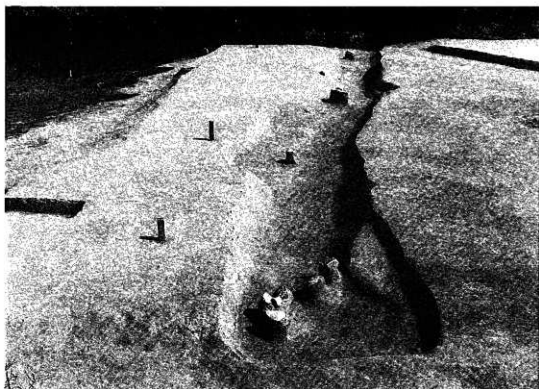
G N 2 地点 完掘状況



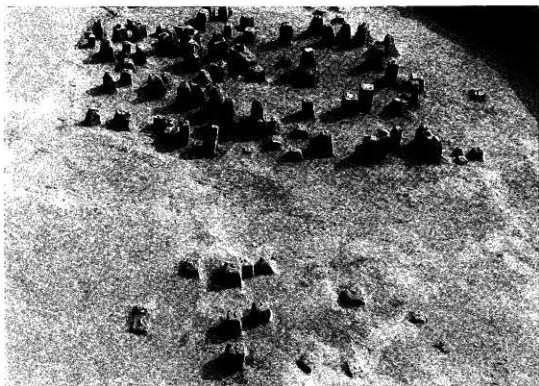
GN 2 地点 I - I 調查狀況



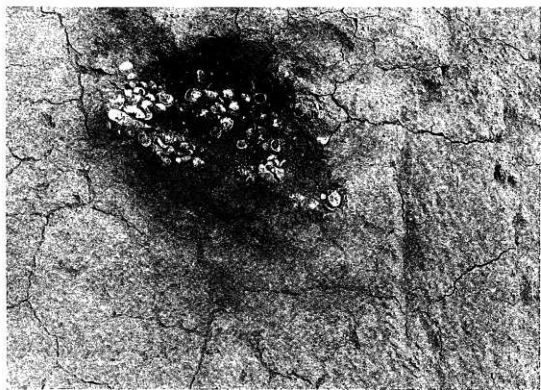
GN 2 地点小穴群調查狀況



G N 2 地点 D - I 調査状況



G N 3 地点西側低地内遺物出土状況



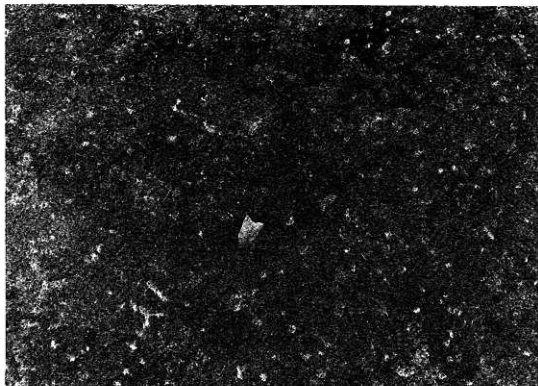
G N 3 地点貝塚検出状況



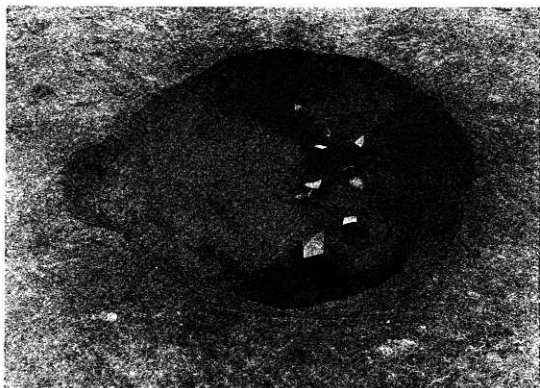
G N 4 地点完掘状況



G N 4 地点周溝墓調査状況



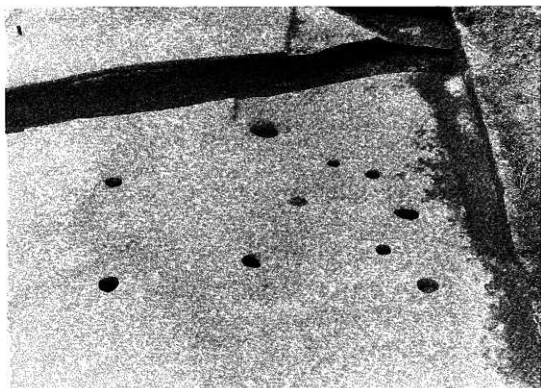
G N 4 地点南東側低地内石鏝出土状況



G N 4 地点 K - I 調查狀況



G N 4 地点 D - I 調查狀況



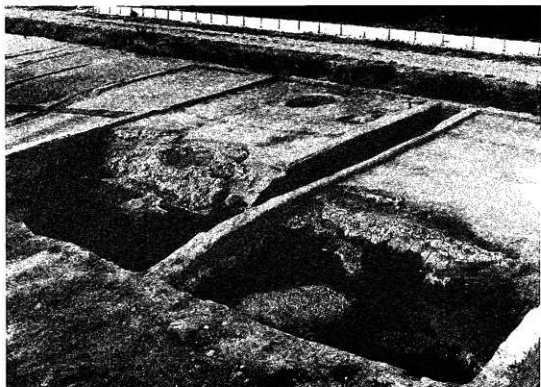
GN 4 地点 P - I 調査状況



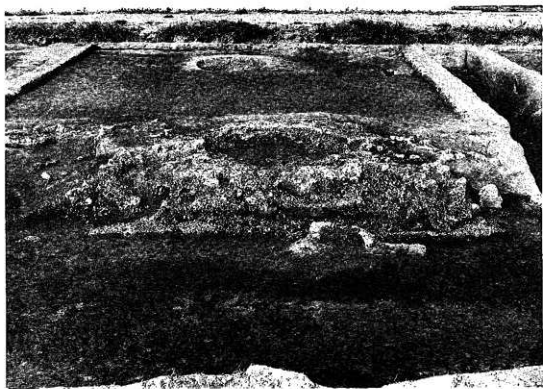
MY 地点 P - I 調査状況



M Y 地点 P - 1 と溝状遺構



M Y 地点貝塚調査状況



M Y 地点貝塚調査状況



M Y 地点貝塚調査状況



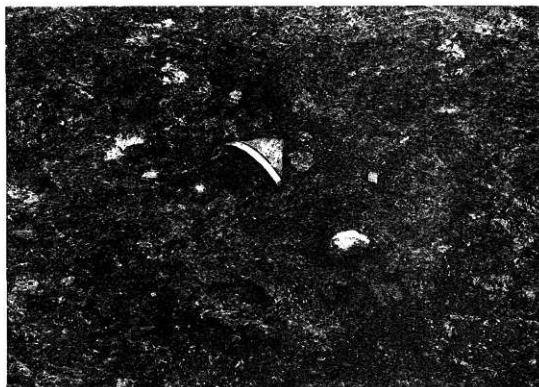
M Y 地点貝塚遺物出土狀況



M Y 地点貝塚断面



M Y 地点井戸群調査状況



M Y 地点 I - II 発見状況

1987年3月31日発行

県営ほ場整備事業浅羽地区内工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
(1985・1986年度分)

権現山遺跡

編集発行 静岡県磐田郡浅羽町教育委員会

執筆 柴田 稔

印刷 磐田市二之宮251
株式会社 山田印刷所